

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第146集

中部地区埋蔵文化財調査報告 II

1987

福岡市教育委員会

福岡市

中部地区埋蔵文化財調査報告Ⅱ

1987

福岡市教育委員会

序 文

福岡市は昭和50年の山陽新幹線の開通以来、九州の中核管理都市としての性格を強め、それと共に博多駅、天神地区を中心とする福岡市中部地区の都市再開発が盛んに行われるようになって来ています。博多駅周辺地区は福岡市内でも博多遺跡群、比恵遺跡群という全国的に著名な遺跡が集中する地域です。

教育委員会では、開発により消滅を免がれない埋蔵文化財については、事前の発掘調査を実施し記録保存に努めています。

本書は昨年度国庫補助を受けて中部地区において実施した博多遺跡群、比恵遺跡群の調査について報告するものです。

本書が「国民共有の財産」である埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、研究資料としてご活用いただければ幸いです。また、調査に際してはモロゾフ株式会社、東洋館の皆さま方をはじめ、多くの方々のご協力をいただきましたことに対し、心から感謝の意を表します。

昭和62年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が国庫補助事業として実施している福岡市中部地区（福岡市中央区、南区、博多区）の埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。
2. 本書には昭和60年度調査の比恵遺跡群第11次調査、博多遺跡群第27次調査の調査記録を収録した。
3. 遺構名称は記号化し、土壤→SK、掘立柱建物→SB、井戸→SE、溝→SDとする。
4. 本書に使用した地形図は国土地理院発行の「福岡西南部（1/25000）」を、又航空写真は国土地理院撮影のものを使用した。
5. 比恵遺跡群の挿図の遺物番号は全体の通し番号で、写真図版中の遺物番号に一致する。
6. 本書に使用する基準方位は磁北であり、真北との偏差は、西偏6度40分である。
7. 本書報告の記録類、出土遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管している。
8. 本書の作成分担は以下のとおりである。執筆分担については文末に氏名を記した。

比恵遺跡群第11次調査 山崎龍雄、米倉秀紀

博多遺跡群第27次調査 井澤洋一、常松幹雄

9. 本書の編集は井澤・常松と協議のうえ、山崎・米倉が行なった。

比恵遺跡群第11次調査

調査地地番	分布地図番号	開発面積	調査対象面積	調査実施面積	調査期間	実働日数
博多区 博多駅南6丁目18番9	37-A-1	732 m^2	732 m^2	580 m^2	1986年2月21日～3月31日	34日

博多遺跡群第27次調査

調査地地番	分布地図番号	開発面積	調査対象面積	調査実施面積	調査期間	実働日数
博多区祇園町1-11	49-A-1	678.46 m^2	678.46 m^2	360 m^2	1985年5月22日～6月18日	25日

本文目次

比恵遺跡群第11次調査

第1章 はじめに	1
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	3
第3章 調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. 遺構と遺物	8
第4章まとめ	40

博多遺跡群第27次調査

第1章 はじめに	49
第2章 調査の概要	52

挿図目次

第1図 比恵遺跡群周辺の遺跡分布図	2
第2図 比恵遺跡群調査地点位置図	4
第3図 遺構配置図 (1/200)	7
第4図 SK 01~04 (1/40, 1/60)	9
第5図 SK 02・03出土遺物 (1/3, 1/4)	10
第6図 SK 04出土遺物 I (1/4)	12
第7図 SK 04出土遺物 II (1/3・1/4)	13
第8図 SK 04出土遺物 III (1/6)	14
第9図 SK 05~10 (1/40)	15
第10図 SK 11~16 (1/40)	16
第11図 SK 09・10・12出土遺物 (1/4)	17
第12図 SE 01~03 (1/40)	19
第13図 SE 02出土遺物 I (1/4)	20
第14図 SE 02出土遺物 II (1/4)	21
第15図 SE 04・05 (1/40)	22
第16図 SE 04出土遺物 I (1/4)	23

第17図	SE 04出土遺物 II (1/4)	24
第18図	SE 04出土遺物 III (1/4)	25
第19図	SE 04出土遺物 IV (1/3, 1/4)	26
第20図	SE 06 (1/40) 及び同出土遺物 (1) (1/8)	27
第21図	SE 05・06出土遺物 (2) (1/4)	28
第22図	SB 01~03 (1/100)	29
第23図	SB 01出土遺物 (2/3)	30
第24図	SD 01・04土層断面図 (1/40)	30
第25図	SD 02・03・05・06 (1/60)	31
第26図	SD 01・03・06出土遺物 (1/3・1/4)	32
第27図	Pit 出土遺物 (1/4)	33
第28図	調査区南西壁土層断面図 (1/100)	35
第29図	包含層上層出土遺物 (2/3・1/3・1/4)	36
第30図	包含層中層出土遺物 (1/2・1/3・1/4)	38
第31図	包含層下層出土遺物 (2/3・1/2・1/3・1/4)	39
第32図	博多遺跡群の立地と環境	50
第33図	博多遺跡群第27次調査中世遺構配置図	51

図 版 目 次

図版 1 比恵遺跡群周辺航空写真

図版 2 (1) I区調査区全景(東から) (2) II区調査区全景(西から)

図版 3 (1) SK 01(西から) (2) SK 02(西から)

(3) SK 03(北東から) (4) 同土層状況

図版 4 (1) SK 04(北から) (2) 同土層状況

(3) 遺物出土状況

図版 5 (1) SK 05(南から) (2) SK 07(南から)

(3) SK 08(北から) (4) SK 10(南から)

図版 6 (1) SK 11(北から) (2) SK 12(東から)

(3) SK 13(北から) (4) SK 14(北西から)

図版 7 (1) SE 01(南から) (2) SE 03(東から)

図版 8 (1) SE 02(北から) (2) 同土層状況(南から)

(3) 骸骨出土状況

- 図版9 (1) SE 04 (北西から) (2) 同遺物出土状況
 (3) 同 (東から)
- 図版10 (1) SE 05 (西から) (2) SE 06 (西から)
 (3) 同土層状況 (西から) (4) 同遺物出土状況
- 図版11 (1) SB 01 (東から) (2) SB 02 (東から)
- 図版12 (1) SD 01・04・05 (南から) (2) SD 01 (東から)
 (3) 同土層状況 (東から)
- 図版13 (1) SD 03 (南西から) (2) SD 02 (北から)
 (3) SD 06 (北東から)
- 図版14 (1) I 区北西壁土層状況 (南東から) (2) 包含層遺物出土状況
 (3) Pit 7 遺物出土状況
- 図版15 出土遺物 (1)
- 図版16 出土遺物 (2)
- 図版17 出土遺物 (3)
- 図版18 出土遺物 (4)
- 図版19 出土遺物 (5)
- 図版20 出土遺物 (6)
- 図版21 出土遺物 (7)
- 図版22 (1) 博多遺跡群第27次調査区とその周辺 (東より)
 (2) 博多遺跡群第27次調査中世面全景 (南より)
- 図版23 (1) 1号井戸 (SE 01) の土層断面 (南より)
 (2) 1号溝で確認された粘土桟の埋葬施設 (北より)

表 目 次

表 1 . 比恵遺跡群調査地点一覧	5
表 2 . 土壌・井戸一覧	8
表 3 . 捜立柱建物一覧	29
表 4 . 土器観察表	42~48

Hi e 遺 跡 群

— 第 11 次 調 査 —



遺跡略号 HIE

遺跡番号 8540

第1章 はじめに

調査に至る経過

申請地（博多区博多駅南6丁目17番12号）の発掘調査の契機は昭和60年7月17日教師60-2-118で福岡市教育委員会埋蔵文化財課第2係へ、モロゾフ株式会社福岡支店より工場増築に伴う埋蔵文化財事前調査願が提出された事による。これを受けた埋蔵文化財課は申請地周辺が福岡市文化財分布地図『中部・南部』による比恵遺跡群内に立地し、当地周辺が1938年の鏡山猛、森貞次郎の発掘調査以来10次に亘る発掘調査が行なわれている、いわゆる周知の遺跡である事から、試掘調査を行ない埋蔵文化財の包蔵を確認した。埋文課としては開発計画変更による現状保存を強く要望し協議を行った。しかし計画の変更はどうしても不可能であり、やむなく記録保存という方法で発掘調査を行なう事となった。発掘調査の費用は一部原因者が、一部は国の補助金によって、昭和61年2月21日から3月31日迄行なった。調査実面積は申請面積732m²中580m²である。

(山崎)

調査体制

調査主体 福岡市教育委員会教育長 佐藤善郎

調査總括 埋蔵文化財課長 柳田純孝

第2係長 飛高憲雄

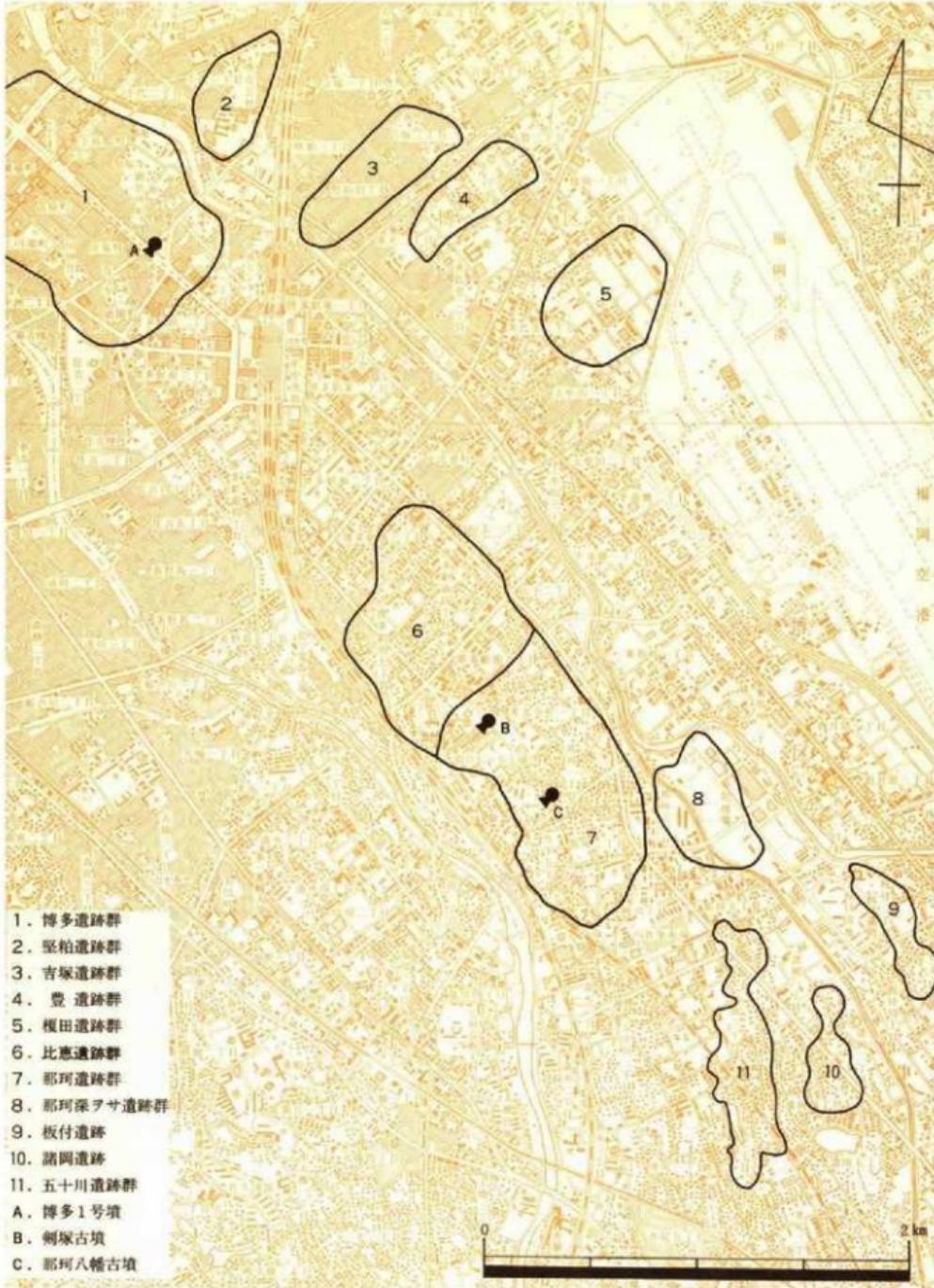
調査庶務 第1係 松延好文

調査担当 第2係 山崎龍雄、米倉秀紀

調査補助員 谷沢仁（現夜須町教育委員会）、宮島成昭（現場写真担当）、平川敬二（遺物写真担当）

調査作業員 神尾順次、三浦義隆、岸原藤雄、中垣親、横井久雄、本多育夫、荒木君子、神尾博子、川崎セツ子、北原ヒサ子、久保山二三子、岡本妙子、高野皓代、徳永ノブヨ、舎川キチエ、西本スミ、糸原幸江、森山キヨ子、山部イキエ、萬スミヨ、播磨博子、徳永ノブ子、鹿児島トシ子、柴田勝子、金子由利子、堀川ヒロ子

資料整理 池田洋子、水井和子、内尾トミ子、岡根なおみ、仲前智江子、池田礼子、吉田祝子、松下節子、井上マツミ、山本久美、松永理香、松田美紀



第1図 北恵遺跡群周辺の遺跡分布図 (1/25000)

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

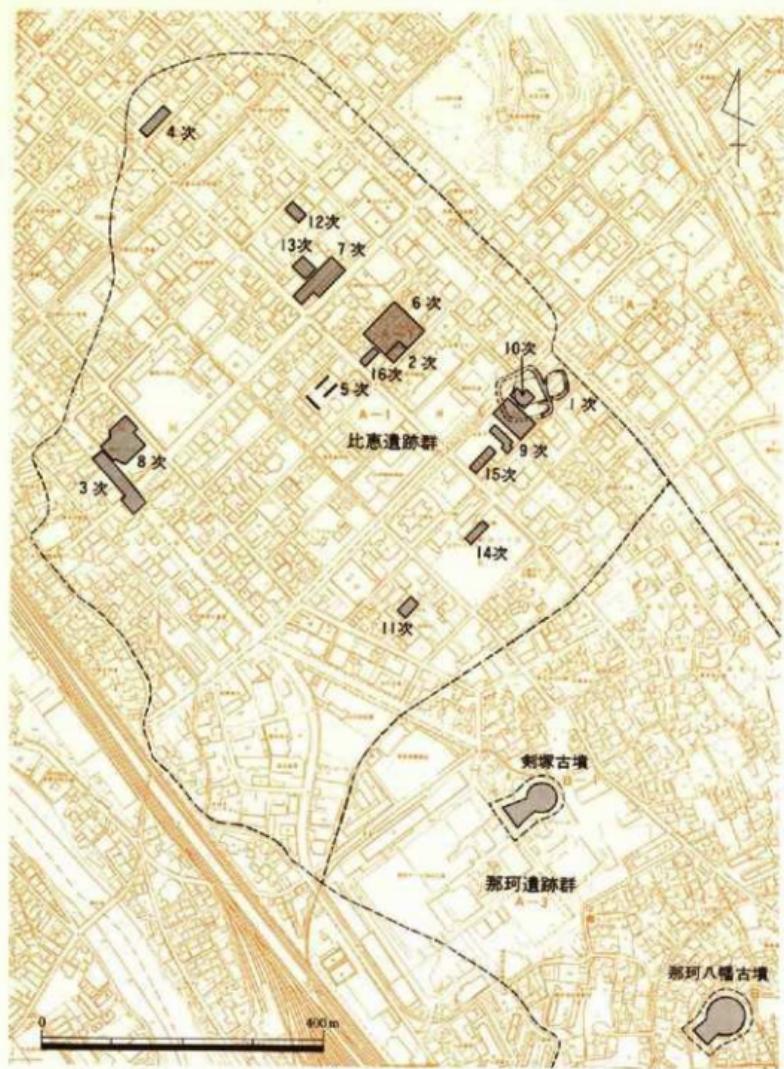
比恵遺跡群は、福岡平野のやや北寄り、25000分の1地図「福岡」の北から約5cm、東から約24cmの地点に位置する。福岡平野は、西側の那珂川水系、東側の御笠川水系によってできた沖積平野で、周辺を花崗岩からなる低丘陵群に囲まれる。平野の中央部には、阿蘇IVと呼ばれる阿蘇火山堆積物によって形成され、南北に伸びる中位段丘群がある。比恵遺跡群はこれらの段丘群のうち、もっとも長い段丘の北端にある。この段丘面は通常那珂台地と呼ばれ、幅0.5~0.9km、長さ約6kmで、南から北になるにつれ低くなり、標高は50m~8mを測る。比恵遺跡群のある台地北端部は、西側に那珂川、東側に諸岡川・御笠川が流れ、北側は低湿地帯をはさんで博多遺跡群のある古砂丘へと続いている。比恵遺跡群周辺は昭和初年の区画整理以来、宅地化の波に洗われて、旧地形はほとんど残っていないが、明治年間の地形図等から考えれば、北に流れ小河川によって谷部が形成され、台地と谷が入り組んでいたものと思われる。

先土器時代の遺跡は、那珂台地やその東側にある諸岡・板付等の台地上から、ナイフ形石器・細石刃核等が出土しているが、未だに不明な点が多い。縄文時代についても、遺物が点々と出土しているのみである。

弥生時代になると遺跡数は増加し、内容が明確になる。台地上には集落や墓地が形成され、台地周辺で水田が営まれる。比恵遺跡群の南東2.5kmにある板付遺跡では、台地上に径110×80mの環壕を巡し、その周辺では縄文時代終末から水船耕作を行なっている。またこの周辺地域²¹からは、青銅器とその鋳型が出土している。青銅器は板付遺跡田端地区（細形銅劍・銅鉢）、比恵遺跡群第6次調査区（細形銅劍）、諸岡遺跡（細形銅劍）²²でいずれも墓地内から細形の青銅武器が出土している。また鋳型は那珂八幡古墳（中広銅戈）、板付遺跡（広形銅鉢）、五十川妙楽寺遺跡（銅鉢）、井尻熊野椎現付近（銅鉢）などで出土している。

古墳時代にも、那珂台地など台地上に多くの住居跡などが検出されているが、その全体の構造はまだ不明な点が多い。水田は板付遺跡北側の那珂君体・久半・深ラサ遺跡で水田跡や大規模な水田の灌漑施設などが検出されている。前方後円墳は、三角縁五神四獸鏡を出土した4世紀初頭頃の那珂八幡古墳（推定全長約75m）、形象埴輪を出土した5世紀初頭頃の博多1号墳²³（推定全長約60m）、内部主体壁面に舟の線刻を持つ6世紀後半の劍塚古墳（全長60m）の3基が確認されており、将来この地域のみで首長權の系統をたどれる可能性をもっている。

歴史時代にはこの周辺の大半は那珂郡に属する。那珂郡衙の所在地は不明であるが、現時点では那珂遺跡群周辺にあった可能性が強い。板付遺跡の南方にある高畠廐寺は8世紀中頃の創建とされ、「郡」「中」「寺」などの墨書き土器が、那珂深ラサ遺跡からは「中寺」の墨書き土器が出土している。中世以降は散発的に遺構・遺物が発見されているだけで、この地域での顕著な遺構群としては、諸岡遺跡で諸岡館と呼ばれる有力名主の居館址が検出されているだけである。



第2図 比恵遺跡群調査地点位置図（縮尺1/8000）

比恵遺跡群のこれまでの調査と成果

比恵遺跡群では、現在までに表1のように16次の調査が行なわれている。これらの調査によって検出した遺構の多くが弥生時代から古墳時代に属する。

縄文時代晩期末から弥生時代前期の遺構は、3・4・8次で検出されている。いずれも台地の端部近くに位置し、検出した遺構は貯蔵穴と思われる袋状竪穴のみである。弥生時代中期は、ほぼ全城遺物が出土するが、遺構はさほど多くなく、台地全城で散発的に井戸が検出され、また遺跡群の中央付近で竪穴住居址や豪族墓群が検出されている。後期には遺構が爆発的に増加する。遺跡群中央付近を中心に竪穴住居址や環濠、中央から西側にかけて豪族墓群、ほぼ全城に井戸が分布し、遺物量も極めて多い。しかし、終末には再び激減する。

古墳時代前期には、再び遺構が散発的に見られ、特に井戸内からは多量の土器が出土している。6世紀になると、7・8、13次調査の成果で、遺跡群の中央から西側一帯に大型掘立柱建物群が出現する事が判って来ている。整然としたプランで、周囲に残る地名などから日本書記に見られる「那津宮家」ではないかと考えられている。

以上簡単に比恵遺跡群について述べたが、当遺跡群に隣接する那珂遺跡群では、弥生時代中期の竪穴住居址群等が検出されており、当遺跡群と補完関係にある可能性が高い。^{参考文献}

比恵遺跡群周辺は昭和初年の土地区画整理以来徐々に開発が進み、特にここ数年は再開発による民間開発が増加し、それに伴う緊急調査も急増している。保存体制の強化が望まれる。

(米倉)

次数	所 在 地 (福岡市東区)	中古面積 (m ²)	新古面積 (m ²)	調査期間	調査実況	主な被 汎 墓・遺 物	備 考	註
1	博多駅南4丁目地内			1958, 1960年	土地区画整理	環濠4、便用巷12	遠山猛氏他調査	14
2	博多駅南4丁目地内			1952年	古賀井田建設	環濠1、土壤3、豪族墓2	古久保武龍調査	15
3	博多駅南5丁目地内			1964年-1967年	森西ビル	環濠4	中京大河原元子他調査	16
4	博多駅南3丁目地内	3300	29113-300426	共用住宅建設	環濠4、便用巷12、古墳時代の土器、豪族墓	吉岡正典氏他調査	17	
5	博多駅南4丁目地内	1600	80414-810731	工場建設	豪族-古墳時代の竪穴住居址群、豪族墓	福岡市教委調査		
6	博多駅南4丁目405-1	3644	825500-826095	専業住宅建て替え	豪族立柱建物群、豪族墓24、环形溝削れ	*	18	
7	博多駅南4丁目10	2129	830720-831130	専業住宅建て替え	豪族-古墳時代の墓塚と豪族の墓地	*		
8	博多駅南5丁目12	4354	840117-840418	社宅造成	豪族-古墳時代の大型立柱建物群、豪族墓13、6C豪族立柱建物群	*	19	
9	博多駅南6丁目6-5	3322	1965	850710-851022	ビル建設	豪族-古墳時代の豪族墓塚。井戸、土壌、房	*	20
10	博多駅南6丁目36	793	555	850915-851001	ビル建設	豪族時代の井戸1、渠1、平安時代の井戸1	*	21
11	博多駅南6丁目14-6	732	580	860221-860331	工場建設	豪族-古墳時代の井戸群、土壌群、半径の井戸1箇	*	本番
12	博多駅南4丁目11	491		860712-860730	ビル建設	豪族時代の竪穴住居址4、古墳時代の豪族立柱建物3、近世の渠1	*	
13	博多駅南4丁目159-3	661		860714-860917	専業住宅建設	北朝時代の井戸1、古墳時代の大型豪族立柱建物1、環濠2	*	
14	博多駅南6丁目9-7	410		860807-860828	工場建設	豪族時代の土壌1、井戸4、古墳時代の豪族立柱建物1、井戸2	*	
15	博多駅南6丁目9-6	568		860805-860927	糸岡山北建設	豪族-古墳時代の渠4、井戸2、古代の渠3	*	
16	博多駅南4丁目15	206		860916-861011	ビル建設	豪族時代の豪族墓4、土壌6、古墳時代の竪穴住居址1箇	*	

* 調査期間の数字は、西暦の末尾2ヶタ、月、日の順である。

表1 比恵遺跡群調査地点一覧

第3章 調査の記録

1. 調査の概要

調査対象地は面積が732m²と狭いうえに、又、遺構面の深さが1.2~1.8mと深く多量の排土が予想された。対象地内で排土の処理を行うという事は作業能率を極端に悪くする恐れがあり、排土の一時的仮置場が必要となつた。しかし不幸にも適当な仮置場が見つからず、委託者の協力によって工場の敷地内に一部土を持ち出し、対象地内で基本的に土を処理する事となり調査を2期に分けて行なつた。前半は西側半分でI区、後半は東側半分でII区と調査区を設定した。発掘調査期間は2月21日から3月31日迄実働日数34日である。

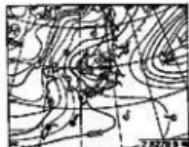
遺構面は東から西に向けて緩やかに下傾する鳥栖ローム・八女粘土面にある。遺構面の標高は高い所で6.2m、低い所で5.1mで、比高差は1.1mを測る。その西側の低地部を中心に最大厚55cmを測る包含層が確認された。遺構面の基本層序は上から盛土60cm、褐色上20~40cm、暗灰褐色土(水田耕作土)20~30cmである。検出した主な遺構は土壙16基、井戸6基、溝状遺構6条、掘立柱建物3棟である。遺構の中には包含層下層より切り込むものもある。検出遺構の年代は出土遺物から弥生時代~近世迄である。包含層の調査については基本的には入力によ

調査日誌

今回の調査は2月21日の重機による表土除去から始まったが、調査の推移を天気図を見ながら述べる。天気図は(財)日本気象協会発行の月刊『気象』1986年4月・5月号によっている。



2月24日(火)
今日から作業員を本格的に投入し、テント設営後、現場作業に入る。今日は冬型が強く福岡地方は西部地区を中心に午後より本格的暴雨、西北部振戸では積雪10cmとか。



2月27日(金)
直撃による表土除去も終わり、雨雲が下りて開始。1号溝やP1の掘り下げを行なう。同時に調査区内杭打開始。全国的に冬型で西日本に寒さが厳しい。



3月5日(水)
包含層の掘り下げと包含層下層から振り下げる4号土壤の振り下げ。大陸高気圧の振り出で天気は晴、四国地方春一番(平年比+14日)とか。



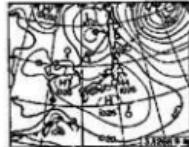
3月8日(土)
今日はI区の全体写真の撮影、摄影用平面実測の為の系張り。高気圧に覆われ一日中晴。春らしい暖やかな陽気となった。



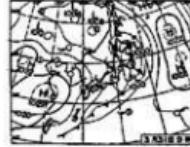
3月13日(木)
I区の実測作業が終了。廻し作業に入る。又、基準杭にレベル移動も行なう。昨日からの寒波現象が今日も見られた。寒波を思われる。



3月17日(月)
I区の打って返し終了。II区の調査に入る。ベルトコンベアを午後から導入し、遺構剥出と杭打ちを行う。北日本を中心とした冬型で全国的に気温低め。

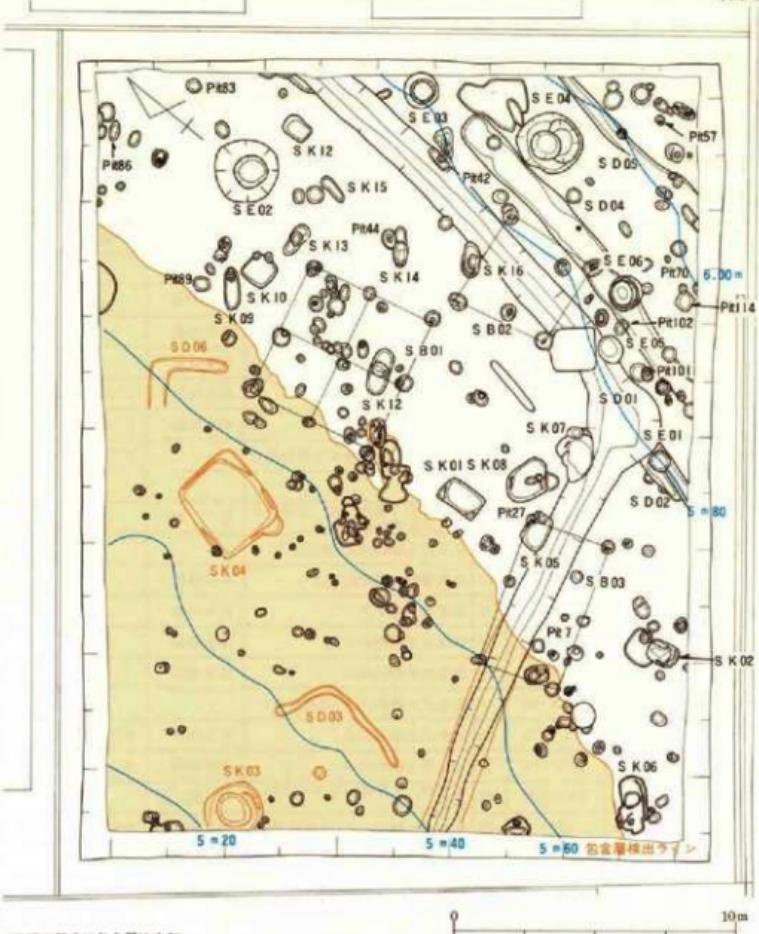


3月26日(水)
午前中調査区の清掃、午後より高所作業車で全体写真の撮影、摄影が終了後平面実測の為の系張り。大陸からの移動性高気圧に覆われ晴。22日鹿児島、24日宮崎で桜開花。



3月31日(月)
今日で現地作業終了。遺構取り上げなどの仕事が終った後、テントをたたみ、雑草除去を行なう。高気圧に覆われ晴れで穏かな1日。1ヶ月前の寒さが夢のようである。

る掘り下げを行ない、遺物の取上げについてはⅠ・Ⅱ区それぞれ層ごとに取り上げた。包含層出土の遺物は多く、弥生時代から古墳時代迄の遺物を含みコンテナ総数で約30箱に及ぶ。遺物は遺構出土分については出来るだけ図化を行なったが、包含層については出土量が多い為、各層毎主な物だけをピックアップした。又、土器の観察記録については表4の土器観察表に記した。
(山崎)



東アミ部分は包含層検出部

第3図 造構配置図(縮尺1/200)

2. 遺構と遺物

(1) 土壌 (SK)

今回の調査で検出した土壌は16基である。その分布は割に散漫であり、SK03, 04など包含層下層上面で検出したものもある。出土した遺物の量はSK04を除いてそれ程多くない。

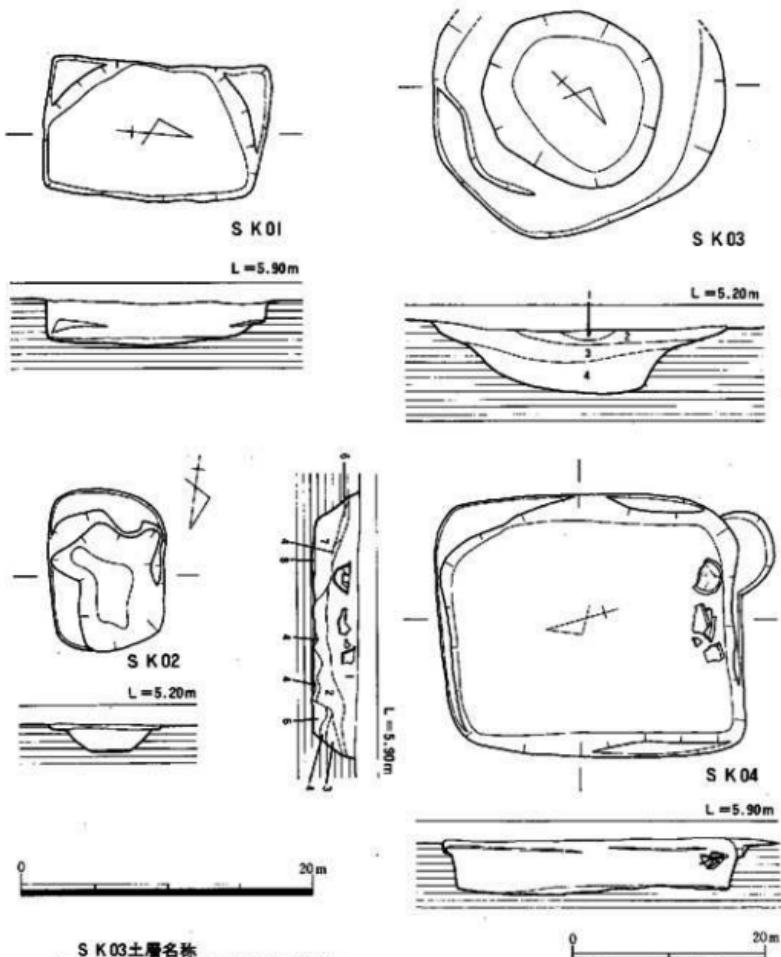
SK01 (第4図、図版3)

調査区中央で検出した主軸を南北方向に取る土壌である。平面形は長方形、床面は平坦で、西側両隅にテラスを有する。覆土は3層に分かれるが、基本的には淡黄褐色、又は暗黄褐色の八女粘土ブロックを主体とする。

出土遺物 弥生式土器片・須恵器片が少量出土している。いずれも細片で図示しえないが、錐先状口縁と思われる口縁部片がある。

遺構番号	平面形態	平面規模(cm)	深さ(cm)	出 土 遺 物	時 期	備 考
SK01	長 方 形	154×96	31	須恵器数点。弥生式土器約30点	古墳時代?	
SK02	長 方 形	114×76	20	弥生式土器(中期) 少量	弥生中期?	
SK03	円 形	径204	56	弥生式土器(中・後期)、石泡丁、磨石	弥生後期	
SK04	長 方 形	318×274	53	弥生式土器(中・後期)、石底丁	弥生後期	
SK05	隅丸長方形	123×94	19	弥生式土器約50点	弥生後期?	SD01に切られる。
SK06	隅丸長方形	106×84	11	弥生式土器約30点	弥生後期?	ビット群に切られる。
SK07	不 定 形	192×145	53	須恵器2点。弥生式土器約30点		SD01に切られる。
SK08	不整椭円形	172×126	10	ナシ		
SK09	楕 円 形	144×50	2	陶器数点、染付1点、須恵器2点。弥生式土器約20点	近 世	
SK10	方 形	106×106	25	弥生式土器約30点(後期が多い)		
SK11	不整椭円形	120×61	31	弥生後期土器片約20点	弥生後期?	
SK12	略 長 方 形	100×72	71	弥生式土器2点	弥生中期?	
SK13	長 椭 円 形	172×72	27	弥生式土器約50点	弥生後期	
SK14	楕 円 形	94×52	68	弥生式土器約30点	弥生後期	
SK15	不整椭円形	110×40	5	弥生式土器約10点(後期が多い)		
SK16	不整椭円形	123×75	38	弥生式土器約30点	弥生後期?	SD01に切られる。
SE01	円 形	径72~76	58	弥生式土器約20点	弥生後期?	SD02に切られる。
SE02	円 形	236×225	188	須恵器、土師器、瓦器、白磁、青磁、石器	13世紀	
SE03	円 形	径95	73	弥生式土器約30点(後期が多い)	弥生後期	未堀
SE04	円 形	229×220	153	古式土師器・石錐	古墳時代前期	
SE05	円 形	径104	219	弥生式土器約30点	弥生後期	
SE06	楕 円 形	102×83	149	弥生式土器、樹木	弥生後期	SD01に切られる。

表2 土壌・井戸一覧



S K 03 土層名称

1. 黒味を帯びた暗褐色粘土まじり砂質土
2. 黑味を帯びた暗茶褐色粘質土
3. やや茶色味を帯びた黑色粘質土
4. 漆黒色粘質土

S K 04 土層名称

1. 灰黑色粘質土にロームブロックをわずかに含む
2. 漆黒色粘質土にローム粒を多く含む
3. 2よりローム粒少ない
4. ロームブロック
5. 暗褐色粘質土
6. 黑褐色粘質土にロームブロックをわずかに含む
7. 灰黑色粘質土にローム粒を多く含む
8. 漆黒色粘質土にローム粒を少量含む

第4図 S K01~04 (縮尺1/6, 1/6)

SK02 (第4図、図版3)

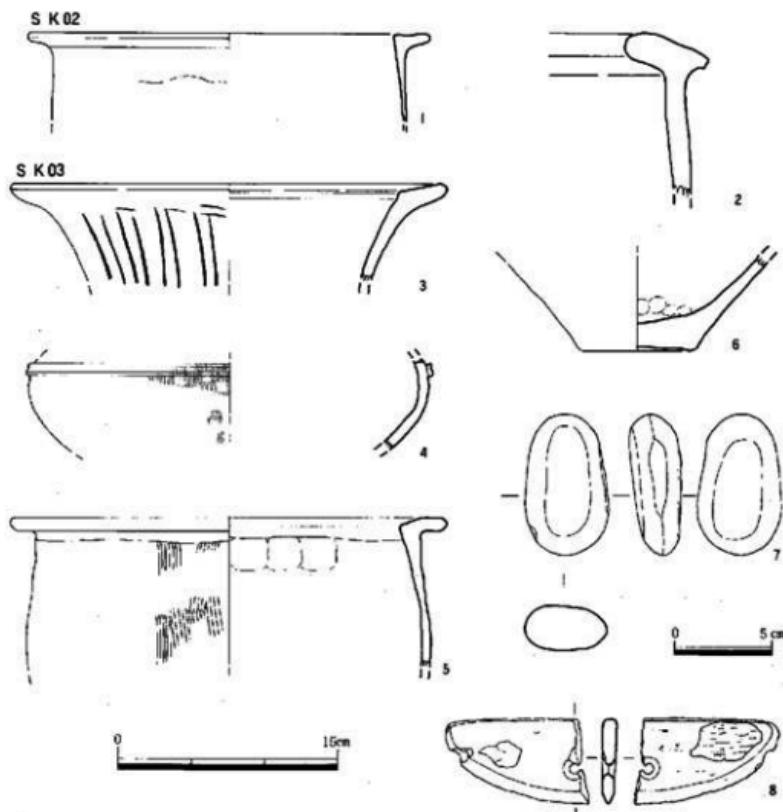
調査区南西隅で検出した主軸を南北方向に取る土壤である。平面形はやや隅丸長方形を呈し、底面は凹凸し、それ程深くない。覆土中には焼土ブロックを含む。

出土遺物 (第5図、図版15) すべて弥生式土器片でほとんどが縁片である。量は少ない。

1・2はともに甕の口縁部片で、口縁部は1が逆L字形、2がT字形で外傾する。

SK03 (第4図、図版3)

調査区西側境界の包含層下層上面で検出した土壤である。平面形は不整円形を呈し、部分的には2段掘りを呈する。覆土は4層に分かれるがほぼ水平堆積である。



第5図 SK02-03出土遺物 (縮尺3/4, 1/4)

出土遺物（第5図、図版15） 弥生式土器片のみでコンテナ1/2弱の量である。縦片が多く図示しうるものは少ないが、器種としては壺・壺・器台などの破片がある。石器としては石庖丁、磨石などもある。

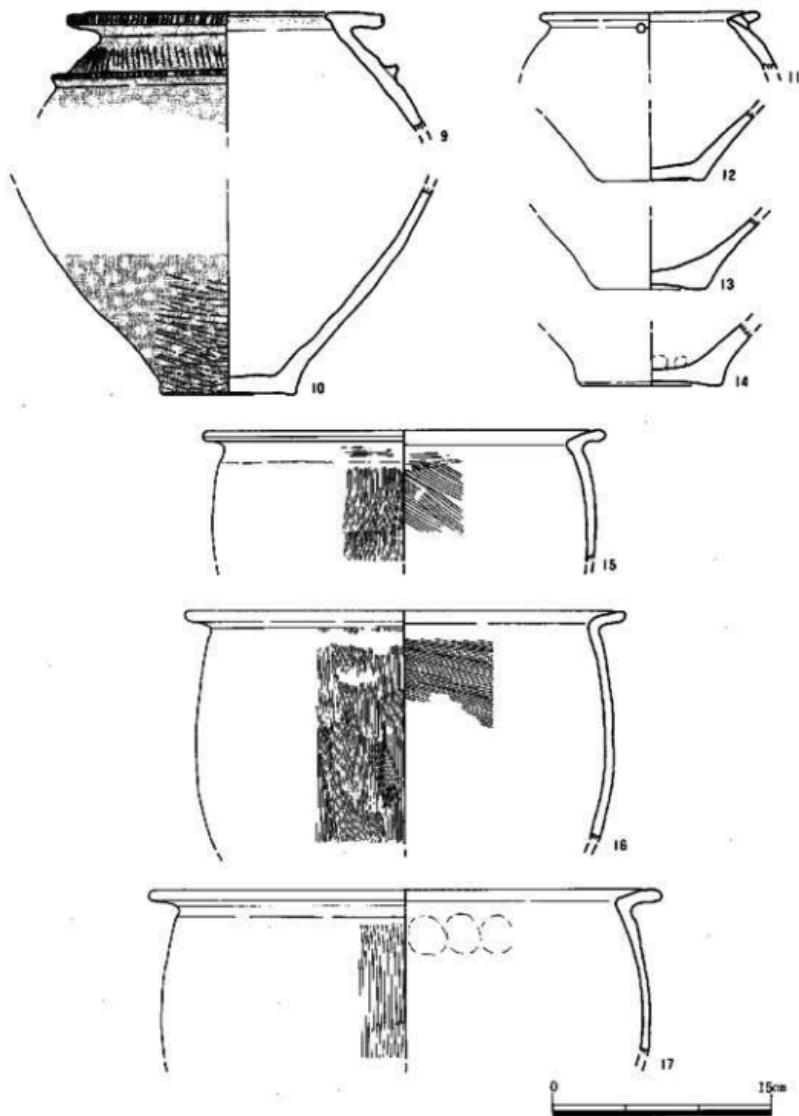
3・4は壺である。3は大きく外に開く大型壺の口縁部片で口縁部内面には段を有す。口縁部外面には黒色顔料による暗文が施される。4は側部片で径の最大部分にM字状の突帯が廻る。外面全体には赤色顔料が施される。5は壺でやや内傾する逆L字口縁を呈する。6は壺か甕の底部片である。7は横円形を呈する磨石で完形。使用により全面が磨滅する。最大長7.3cm、最大幅4.3cmを測る。色調は淡灰褐色、石材は目の細かい砂岩である。8は石庖丁である。刃部は外湾し、両面から研ぎ出される。研ぎ出しの後線は明瞭であるが使用により刃こぼれが激しい。紐通し孔は刃部に近い下半にある。現存長7.4cm、最大幅4.4cmを測る。小豆色輝緑凝灰岩製である。

SK04（第4図、図版4）

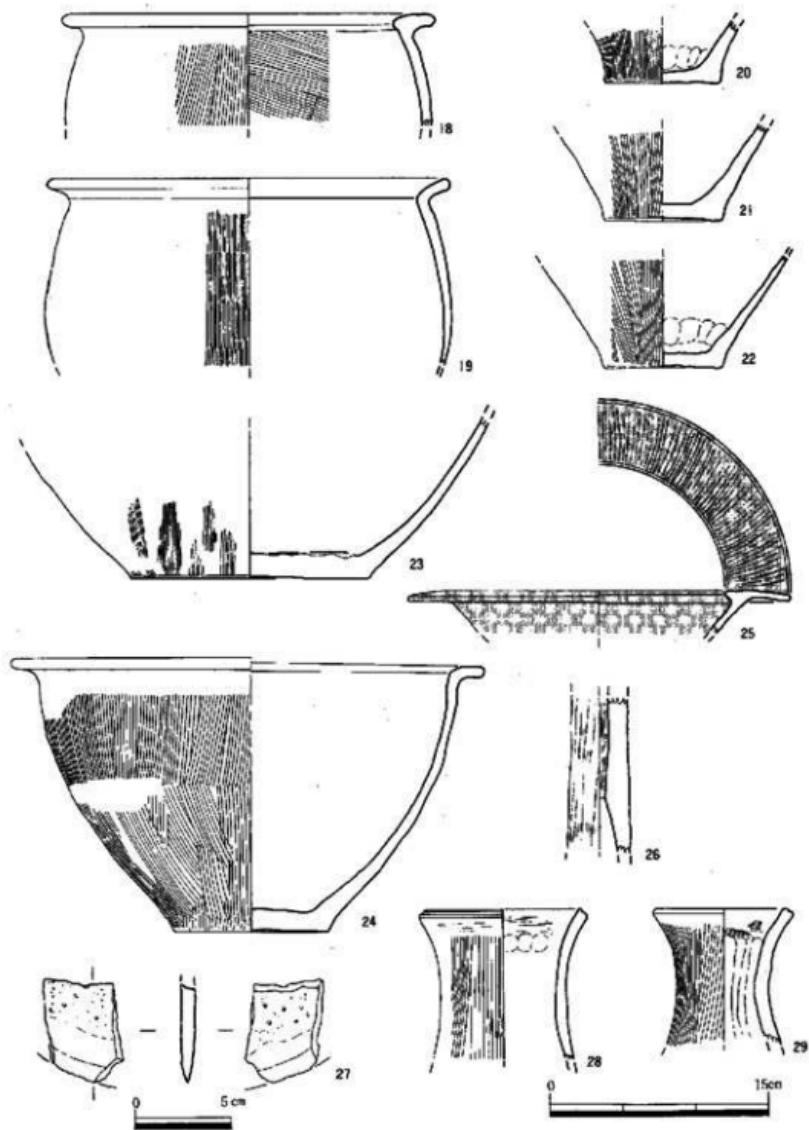
調査区中央北側、包含層下層上面で検出した主軸を南北方向に取る長さ3.18m、幅2.74m、深さ0.53mを測る大型の土壠である。平面形は長方形、断面は逆台形、底面は若干の凹凸があるが、ほぼ平坦である。覆上は大きく2層に分ける事が出来る、上層は灰黒色粘質土、下層は漆黒色粘質土もしくは少し灰色味のある黒色粘質土である。

出土遺物（第6～8図、図版15・16） 上層を中心に多量の土器が出土した。量としてコンテナ4箱程度である。すべて弥生式土器片で、その時期は中期中頃から後期初め迄とやや時代幅がある。完形品はなく一括廃棄された様な状況を示す。器種には壺・甕・鉢・器台などがあり、石器としては石庖丁がある。

9～14は壺である。9は丹塗上器の口縁部片である。口縁部はすばまり、口縁端部には刻目がつく。外面はヨコヘラミガキ。10も丹塗土器の底部片で外面はヨコヘラミガキである。9と10は同一個体の可能性がある。11は小型の短頸壺で口縁部はく字状に外反する。12～14は底部片で、13、14はやや上げ底気味である。15～23は甕である。15～19は口縁部片で、程度の差こそあれく字状に外反する口縁である。外面はいずれもタテのハケ目調整。20～23は底部片である。20～22は底径の大きさは違うがほぼ同タイプ、22はわずかに上げ底、20、22は内底面に指おさえ痕を残す。23は底径が大きく、胴部が内湾気味に大きく開く。外面は粗いタテのハケ目を板状工具によりナデ消す。甕の底部片の可能性もある。24は鉢で唯一のはば完形品、口縁部は水平を呈するように外折する。体外面はタテ又はナナメのハケ目調整。25、26は高杯である。いずれも丹塗である。25は鋤先状の口縁部片で、口縁上面に赤色顔料による暗文が入る。26は筒部片である。28、29は器台で、いずれも上半にくびれを持つが、29の方がよくしまり、しづり痕跡を明瞭に残す。30は後期初頭に位置づけられる腰棺で、胴部下半を欠失する。口径43.4cmを測る。27は砂岩製の石庖丁である。刃部は両側より研ぎ出されるがその後は明瞭でない。



第6図 SK 04出土遺物 I (縮尺1/4)



第7図 SK04出土遺物Ⅱ（縮尺1/3, 1/4）

敲打調整痕が部分的に残り、色調は灰色を呈す。小片で全体の形状は不明。

SK05 (第9図、図版5)

調査区中央南側にありSD01に切られ、主軸方向を東西に取る土壤である。SD01に切られる為全体の平面形状は不明だが、現状では隅丸方形を呈する。北側隅はSB03の柱穴に切られる。覆土は黒褐色粘質土に八女粘土ブロックを混入する。

出土遺物 弥生式土器片が少量出土。いずれも細片で図示しえない。

SK06 (第9図)

調査区南端で検出した主軸方向を北東に取る土壤である。平面形は不定形で、底面は凹凸があり、深さは12cmと浅い。明確な遺構とは考えられず、たんなる落ち込みと考えた方がよい。

出土遺物 弥生式土器片が出土している。いずれも細片で、量はごくわずかである。

SK07 (第9図、図版5)

SD01に切られる土壤で、全体の平面形状は不明。底面は皿状に深い。覆土は黄褐色八女粘土ブロックと黒色粘土ブロックの混合で、上半が八女粘土、下半が黒色粘土ブロックが多い。

出土遺物 出土量が少ない。須恵器の腰脇部細片2点をのぞいてすべて弥生式土器片。細片で図示しえない。

SK08 (第9図、図版5)

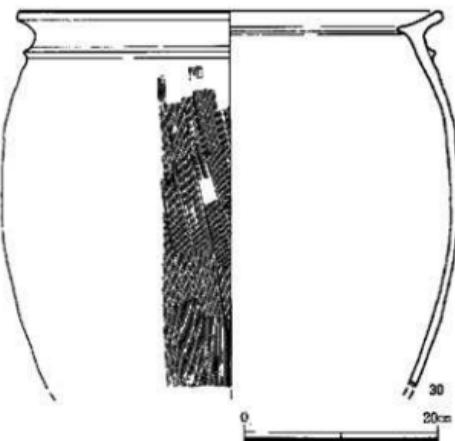
調査区中央で検出した主軸方向を南東に取る土壤である。平面形は不定形で、深さは10cmと浅く、底面は凹凸がある。覆土は主に黒褐色粘質土に八女粘土ブロックを少量含む。

出土遺物 出土遺物はない。

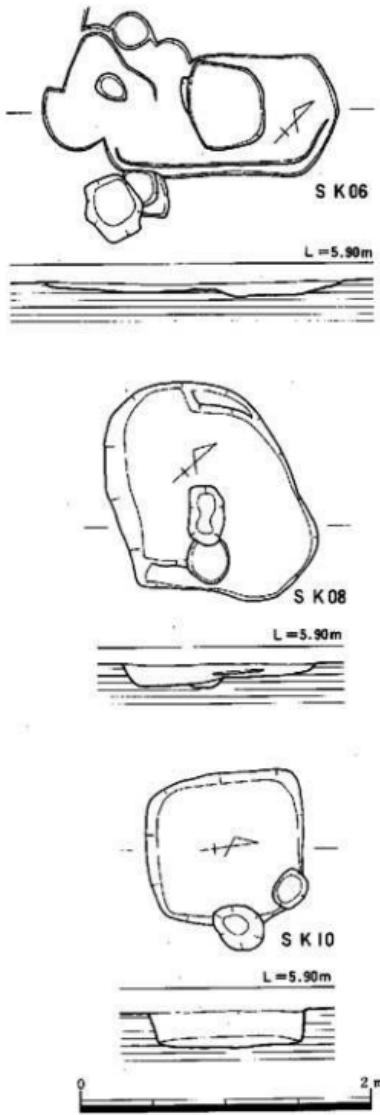
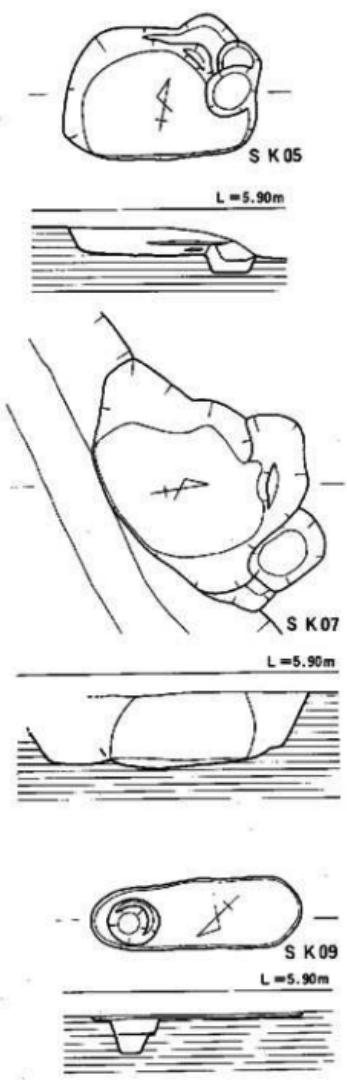
SK09 (第9図)

調査区中央や北側で検出した主軸方向を北東に取る土壤である。平面形は長楕円形で浅く、北端には直径35cm、深さ24cmの円形ピットがある。

出土遺物 (第11図、図版16) 出土量は少ない。弥生式土器片がほとんどであるが、中に土師器や、須恵器、陶器、染付の細片を1・2点ずつ含む。31は弥生式土器の器台底部片である。全体指おさえ仕上である。



第8図 SK04出土遺物III (縮尺1/6)



第9図 SK 05~10 (縮尺1/40)

SK10 (第9図、図版5)

SK09の東側で検出した主軸方向を南北に取る土壤である。平面形は隅丸方形で北側は2ヶのピットに切られる。底面は中央がやや深くなる。覆土は單一で黒色粘質土に少量の八女粘土ブロックを混入する。

出土遺物 (第11図、図版16) 出土量は少ない。すべて弥生式土器片である。細片がほとんどで図示できるものは少ない。32は腰か壺の底部片である。胴部は底部より大きく外方へ開く。

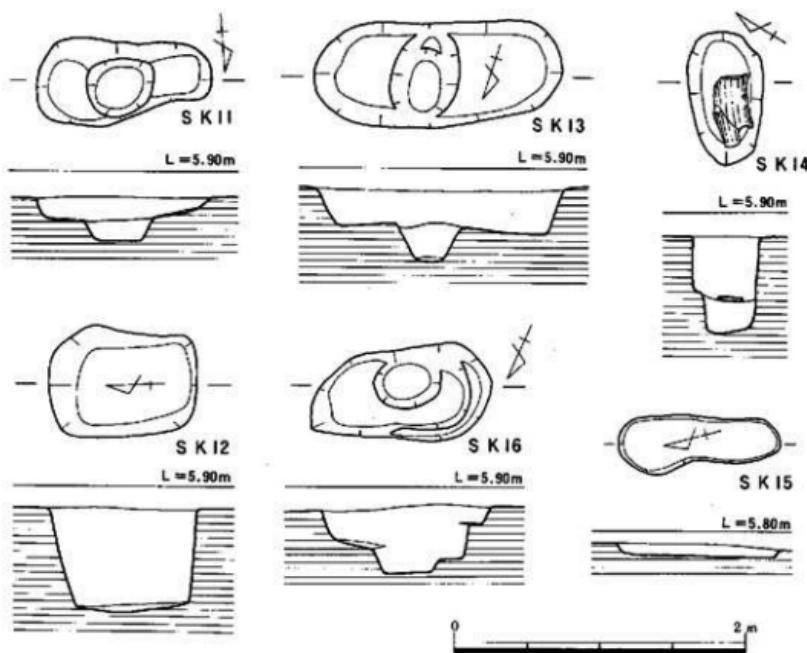
SK11 (第10図、図版16)

SK10の東側で検出した主軸方向を東西に取る土壤である。中央に長径45cm、短径40cm、深さ15cmの略円形のピットがある。覆土は主に黒褐色粘質土で黄褐色ロームブロックを少量含む。

出土遺物 弥生式土器片が20点出土しているが細片で図示出来るものはない。

SK12 (第10図、図版6)

調査区北側で検出した主軸方向を南北に取る土壤である。平面形は隅丸方形で、深さは71cm



第10図 SK11~16 (縮尺1/40)

と深い。断面形は逆台形を呈し、底面は皿状に中央が深くなる。覆土は黒色粘質土にロームブロックを少量混入するが、底近くはブロックの混入が多くなる。

出土遺物（第11図、図版16） 出土量は少ない。33は弥生式土器の變底部片で、細く縮ったあげ底を呈する。34は逆L字状の口縁部である。

SK 13（第10図、図版6）

調査区中央で検出した主軸方向を北東に取る土壤である。平面形は長楕円形である。底面はほぼ水平であるが、中央に長径60cm、短径46cm、深さ26cmの楕円形のピットが掘り込まれる。覆土は上部の土壤部分は黒色粘質土に黄褐色又は白色八女粘土ブロックを含み、ピット部分は黄褐色又は白色八女粘土ブロックに黒色粘質土を混入する。

出土遺物 出土量は少ない。すべて弥生式土器である。器種としては甕、器台と思われるものがある。石器としては砾石があるが、いずれも細片で図示しえない。

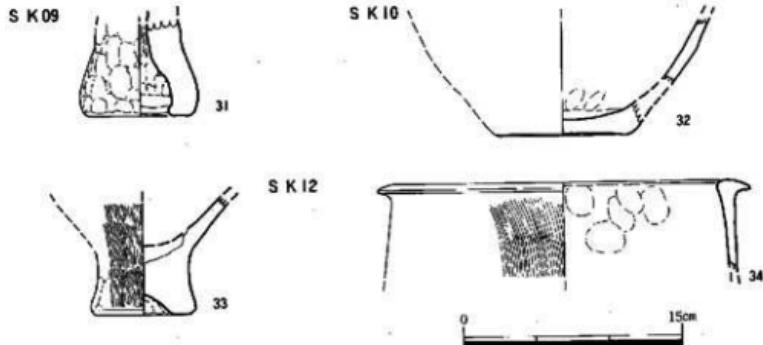
SK 14（第10図、図版6）

調査区北側で検出した主軸方向を北東に取る土壤である。平面形は不整楕円形で、深さは68cmを測る。深さ40cmの所に長さ約50cm、幅約25cm、厚さ2cmの調整のやや荒い板材があった。掘立柱建物の柱穴礎板の可能性を考えたが、建物としてまとめ得なかった。覆土は上下2層に分かれ、上層は礎板下迄で黒色粘質土にロームブロックを多く含む。下層はその逆である。

出土遺物 出土量は少ない。土器片らしきものが1、2点ある外はすべて弥生式土器片である。いずれも細片で図示出来ない。

SK 15（第10図）

調査区北側で検出した主軸方向を南北に取る土壤である。平面形が不定形の土壤で、底面はほぼ水平である。深さは5cmと浅い。覆土は淡黒褐色粘質土に八女粘土ブロックを混入する。



第11図 SK 09-10-12出土遺物 (縮尺1/4)

出土遺物 出土量は少ない。大半が弥生式土器片であるが、土師器片を2点含む。いずれも細片で図示しない。

SK16 (第10図)

SD01に切られる土壇で主軸方向は北東を取る。平面形は不整橢円形を呈す。西側に一部テラスを有し、底面には長径45cm、短径35cm、深さ17cmのピットがある。底までの深さはピット上面迄は38cm、ピット底迄は47cmである。覆土は3層に分かれるが、その違いは黒褐色土とロームブロックの混合具合による。1間×1間と考えられるSB02の柱穴の可能性もある。

出土遺物 出土量は少ない。すべて弥生式土器片であるが、いずれも細片で図示しない。
(山崎)

(2) 井戸 (SE)

井戸は6基検出した。すべて調査区東間に分布する。深さは0.73~2.15mと深浅があり、形態も異なっている。SE02・04・06は出土した遺物の量は多く、残りの3基は少ない。

SE01 (第12図、図版7)

調査区南側の中央で検出した。平面形は円形で、直径0.71~0.75m、深さ0.73mを測る。最上部の大部分をSD02に切られる。覆土は黑色粘質土と暗褐色粘質土、八女粘土の混合土で、下部の方が、黑色粘質土が多い。

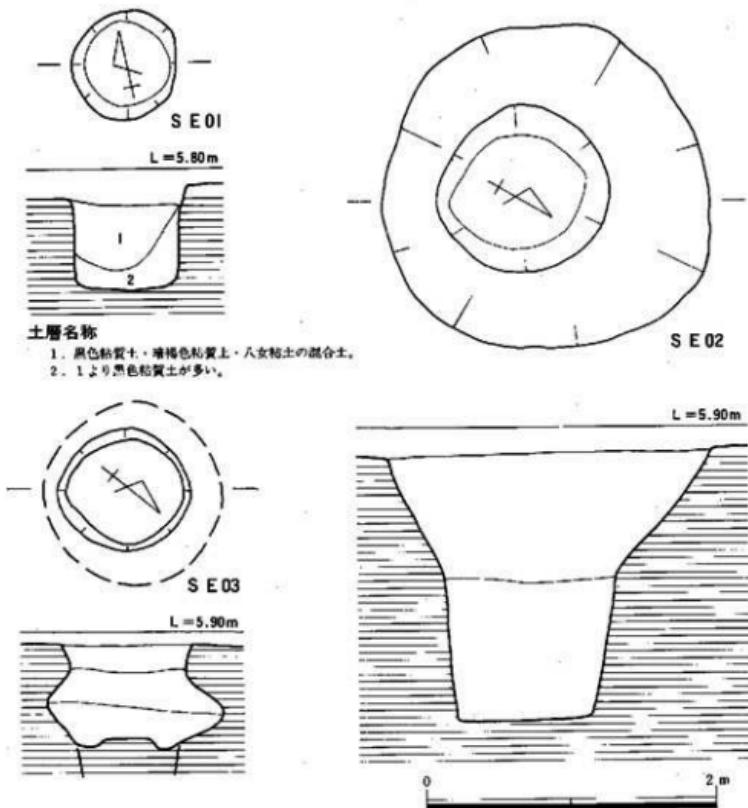
出土遺物 弥生式土器が少量出土したが、いずれも細片で図示しない。

SE02 (第12図、図版8)

調査区東北端近くで検出した。平面形は円形を呈し、直径約2.2m、深さ約1.85mを測る。2段掘りで、深さ約0.9mのところで屈曲する。屈曲部の直径約1.1m、底の直径は約1.0mを測る。土層断面に一部井筒の痕跡が認められた。覆土は細かく分層できるが、大きく3層に分けられる。井筒上部の周囲は主として暗茶褐色土、井筒の上部は黒灰色土、井筒下部は黄灰褐色シルトで、いずれも鳥栖ローム、八女粘土ブロックを含む。

出土遺物 (第13・14図、図版17) 遺物の大半は井筒内から出土し、土師器・須恵器・陶磁器・石器・獸骨が、整理箱2箱程度出土した。35~37は須恵器である。35は壺蓋、36は壺身で、小田富士雄氏の編年のIVa期に属する。37は甕の口縁部片である。38~41は瓦器碗である。38は口径15.6cm、器高5.0cmを測る。底部から口縁部までゆるやかに内湾する。高台の断面形は略台形を呈す。全面ナデで仕上げる。39~41は底部片である。高台断面はいずれを丸味を帯びるが、40は外底部分が他に比べて高く、41の高台は外に開く。いずれもナデ調整を施すが、39の内面は板状工具でナデる。また39の上部は、炭素を吸着して黒灰色を呈する。42~45は白磁碗である。いずれもやや緑がかった透明釉を薄く施すが、42・43はやや乳白色を帯び、釉を厚くかけている。42~44は口縁部片で、口縁端はいずれも外につまみ出す。45は底部片で、見込みに圓線が巡る。外底部と疊付けは露胎である。

46は砂岩製の磨製石斧で、全長15.4cm、幅6.9cm、厚さ5.7cmを測る。刃部はつぶれている。基部周辺には敲打調整痕が明瞭に残る。47は砂岩製の扁平な石器で、全長17.3cm、幅13.8cm、厚さ3.0cmを測る。平坦な両面は使用による研磨が認められる。台石か。48は叩石兼磨石で、欠損している。玄武岩製である。幅11.9cm、厚さ9.2cmを測る。両端を叩石として、側面を磨石として使用していたと思われる。49は現存長11.0cm、幅7.8cm、厚さ5.9cm、重さ583gを測り、欠失している。火成岩系の石材を使用する。端部を叩石として利用する。両側縁には抉りがはいる。石鎌として利用していたものを、叩石に転用したものと思われる。50は全長14.2cm、幅



第12図 SE 01~03 (縮尺1/40)

10.1cm、厚さ3.6cmを測る。玄武岩製で842gを測る。両面に直径3cm程度の凹みがあり、ほぼ全面が使用によって磨かれる。両側面に浅い抉りがあり、ひもすれ痕が認められる。石錐を凹石に転用したものと思われる。

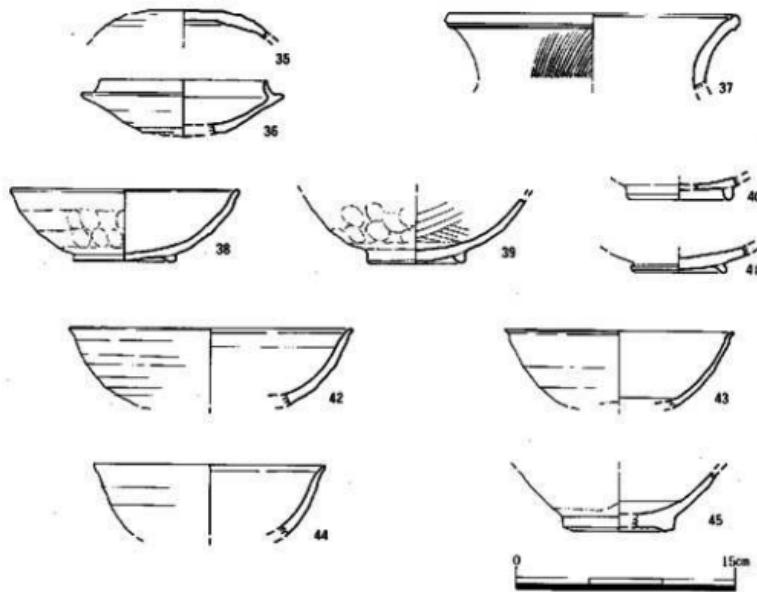
SE03 (第12図、図版7)

調査区東端、SE02の南東で検出した。平面形は円形で、直径約0.9mを測る。調査者の不手際によって発掘していないものと思われる。深さ約0.5m、標高約5.4mのところに抉り込みが認められる。覆土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 弥生式土器が少量出土したのみで、図示し得るものはない。

SE04 (第15図、図版9)

調査区南東部で検出した。平面形は略円形を呈し、直径2.2~2.3m、深さ約1.5mを測る。井戸の南半分には、深さ0.9~1.0mのところにテラスを有する。井戸の中央やや西寄りに、直径約1.2mの井筒痕がある。覆土は大きく3層に分けられ、井筒上部(第15図の点線内)が、黒褐色粘質土、その周囲は、鳥栖ロームブロックに帯状の黒色土ブロックが数条はいる。井筒下部は黒褐色土ブロックを混じえた八女粘土ブロック層である。出土した遺物の大半は井筒内の黒褐色土層内から出土し、大きく上部と下部に遺物の集中が認められる。

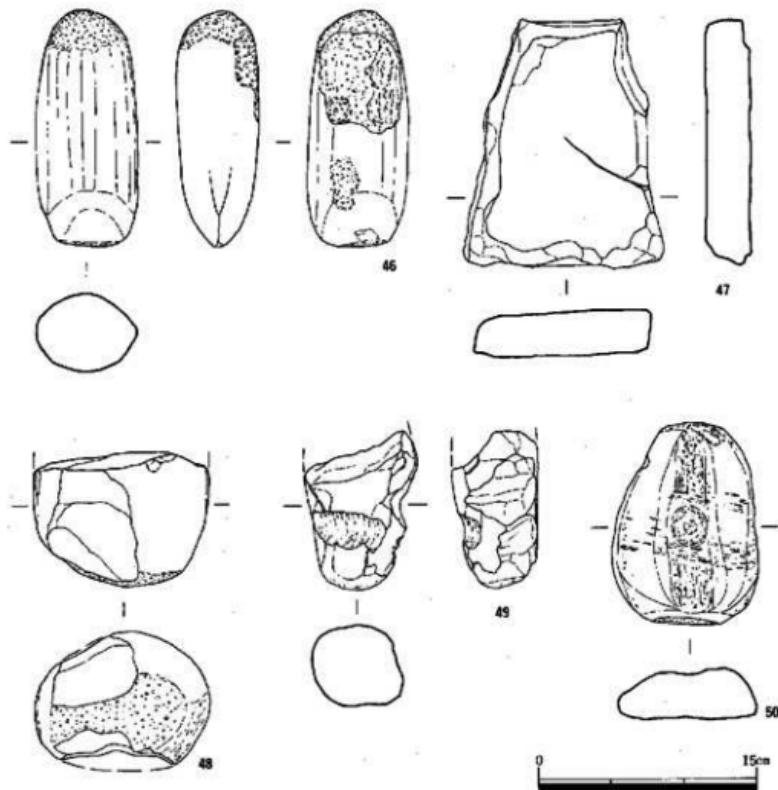


第13図 SE02出土遺物 I (縮尺1/4)

出土遺物（第16～19図、図版17～19） 弥生式土器が少量と大量の古式土師器、石錐と思われる石器1点が出土している。

51は弥生式土器で鉢である。口縁部先端を欠失している。胴部は丸味を帯び、平底である。

52～78はいわゆる古式土師器である。52～60は壺で、52・54・55は小形丸底壺、57は長頸壺、53・56は広口壺、58～60は複合口縁壺である。小形丸底壺は52から54・55になるにつれ、外反する口縁部が短くなるにつれ、口径・胴部最大径・器高がいずれも大きくなっている。55はあるいは鉢にはいるかもしれない。57の長頸壺は胴部両面に目の細かいタテハケを施し、口縁部内面に4条を1単位とする暗文を施している。53・56はいわゆる在地形土器で、どちらも外

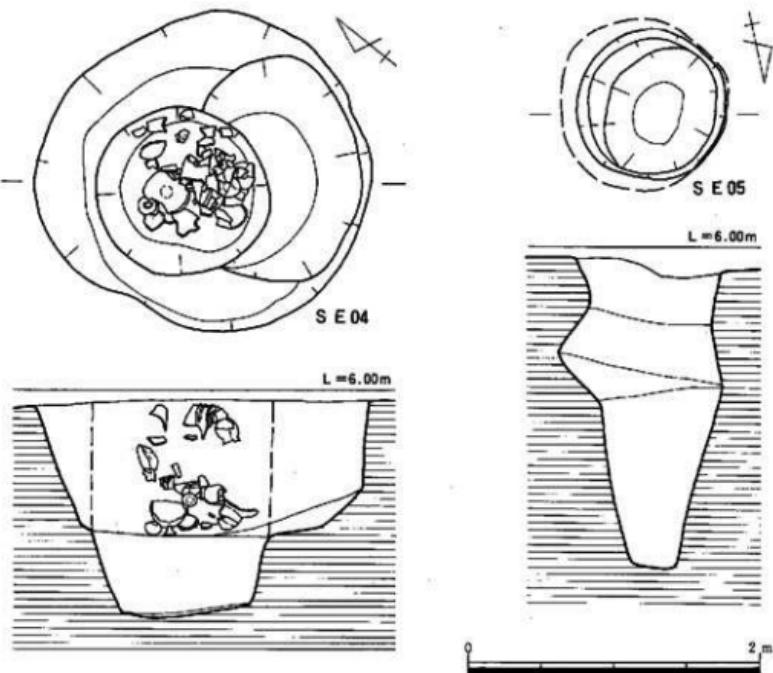


第14図 SE 02出土遺物 II (縮尺1/4)

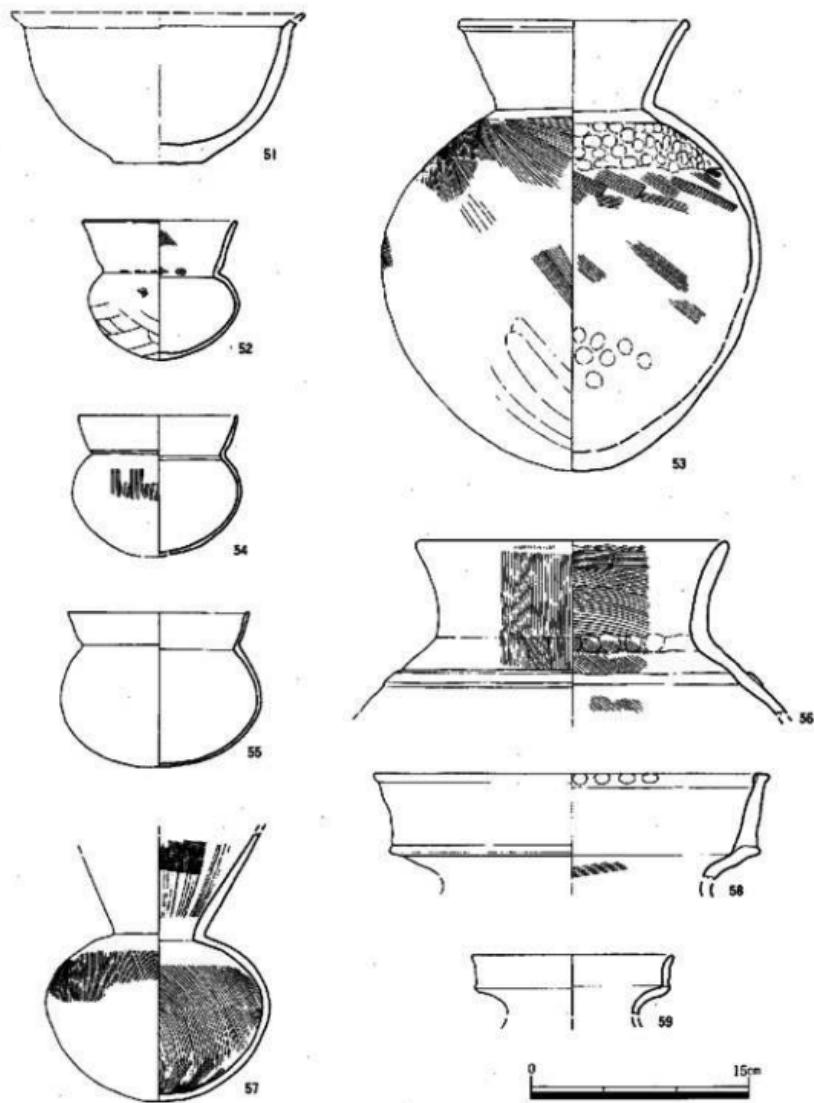
反する口縁部を有するが、53は頸部のしまりが強く、屈曲部が明確であるのに対し、54は丸まつた頸部をもつ。また54は頸部に幅広で低い凸帯を一条施す。58～60は複合口縁壺で、大形のもの（58・60）と小形のもの（59）がある。58は外傾する口縁部片で、口縁端はいわゆるつまみ上げ口縁である。口縁端内面には、指おさえによる凹みを1.5cmおきに連続して施す。59の口縁部はほぼ直立するが、口縁端部は外反し、丸くおさめる。60はいわゆる山陰系土器で、口径24cm、胴部最大径36.95cm、推定器高44cmを測る。口縁部はやや外反し、先端部はつまみあげる。胴部は倒卵状を呈す。頸部に、貝殻腹縁の押圧による有輪羽状文を施す。

61～71は壺である。口縁部はほぼ直線的に開くが、63はやや内湾ぎみに開く。61以外は口縁端をつまみあげる。胴部はやや縦に長い略球形を呈す。65には波状文が、71には沈線が胴上半部にヘラ描きによって施される。

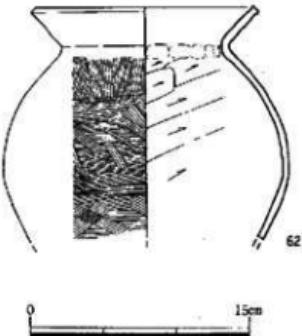
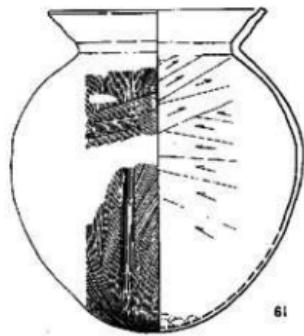
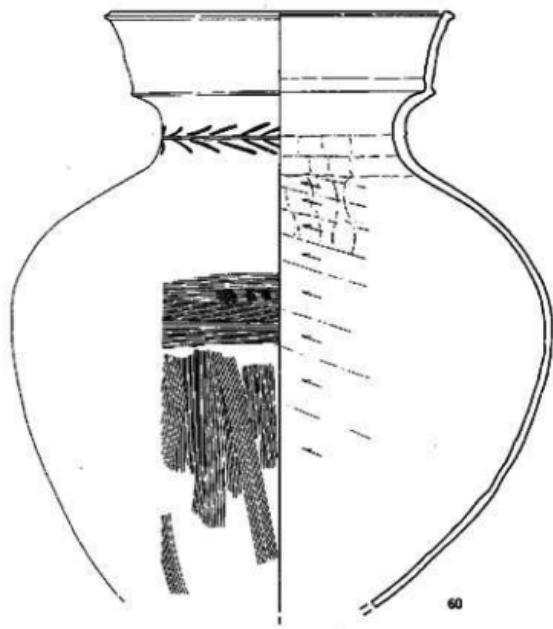
72は浅い壺で、口径12.2cm、器高3.2cmを測る。全面ナデ仕上げである。73は底部片で、台



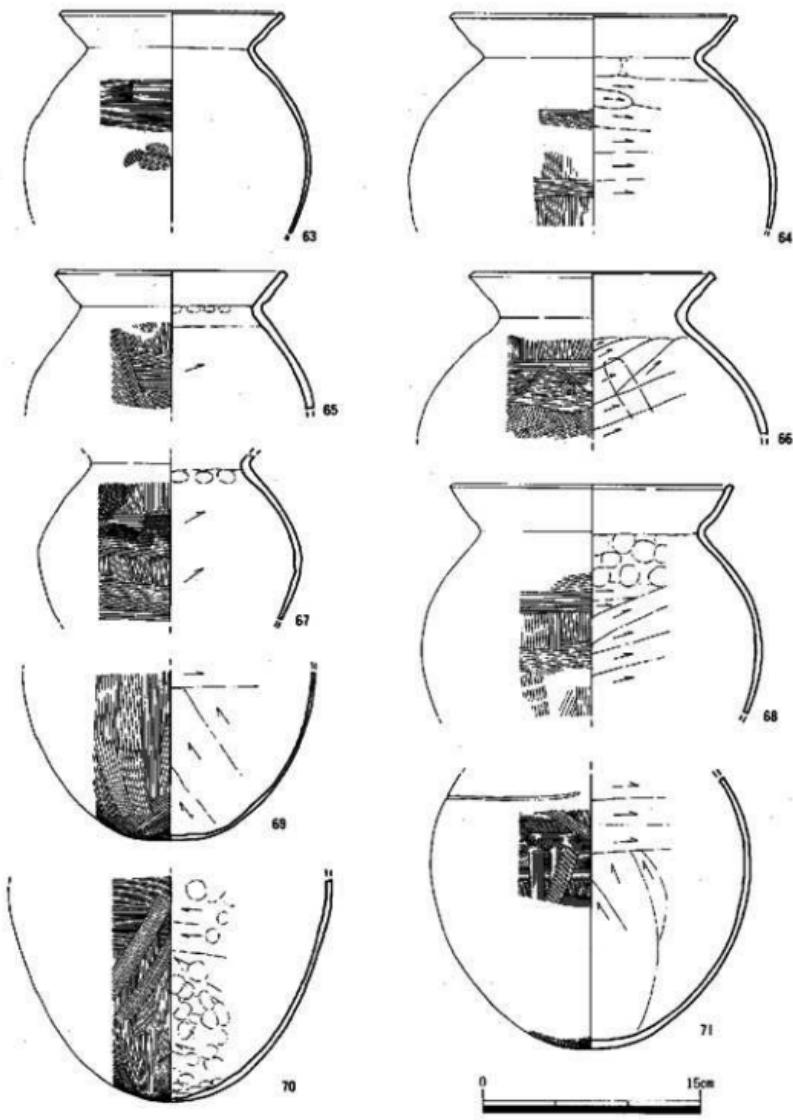
第15図 SE 04・05 (縮尺1/40)



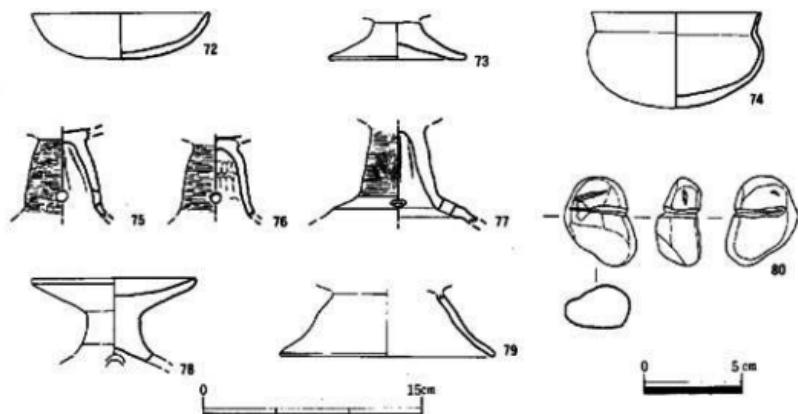
第16図 SE 04出土遺物 I (縮尺1/4)



第17図 SE 04出土遺物 II (縮尺1/4)



第18図 SE 04出土遺物Ⅲ（縮尺1/4）



第19図 SE 04出土遺物IV (縮尺1/3, 1/4)

付の塊と思われる。底径9.4cmを測る。74は鉢で、短かく直線的に外傾する口縁部を丸い脚部を持つ。口径11.5cm、器高6.6cmを測る。75~77は高杯の筒部片であるが、75・76と77は器形が異なる。75・76は筒部中央がやや外にふくらみ、裾部は直線的に開くものと思われる。外面はヘラナデ調整を施す。77の筒部は直線的で、脚裾部は途中で段を有し、器厚が薄くなる。外面にはタテハケを施す。78は器台である。浅く低い受け部を持つ。脚部上方に2ヵ所穿孔を施す。口径11.2cmを測る。79は底部片で、底径15.7cmを測る。80は砂岩製で、全長4.6cm、幅3.7cm、厚さ2.3cmを測る。中央部付近に、一面を除いて全局するように線刻状のひもづれ痕が認められる。石錘であろう。

SE 05 (第15図、図版19)

調査区南東側で検出した。西半をSD 04に切られる。平面形は直径1.05mの円形を呈し、深さ2.17mを測る。底になるほど狭くなり、底は直径0.5m、短径0.3mの橢円形を呈する。深さ0.7m、標高5.2m付近が抉れている。

出土遺物 (第21図、図版19) 弓生式土器が30点ほど出土している。82・83はいずれも弓生式土器の裏で、いずれもく字状口縁に近い形態を呈すが、83はやや逆L字状である。

SE 06 (第20図、図版10)

調査区南東側で検出した。西半をSD 01に切られる。平面形は長径1.02m、短径0.83mの橢円形を呈する。深さは1.49mを測る。深くなるにつれてやや狭くなり、底の直径約0.6mを測る。覆土は大きく2層に分かれ、上層は黒色粘質土、下層は八女粘土ブロックである。上層の下部、標高約5.2~5.5mのところに86・89等の土器、その下に丸太材、さらに少し離れた下に90の土

器が出土した。

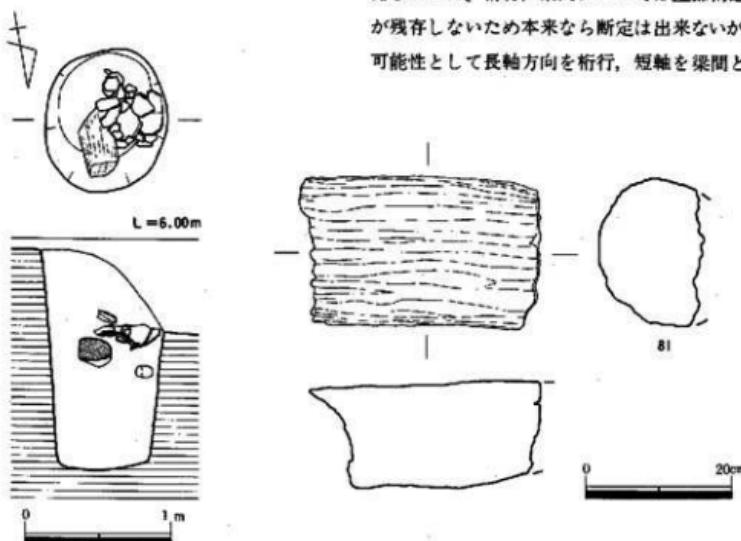
出土遺物（第20・21図、図版19） 図示した遺物以外には少量出土しただけである。

84～92は弥生式土器である。84～87は壺である。84・85は口縁部片で、84は外面が複合口縁状を主するが、断面形はむしろT字口縁に近い。類例を見ない器形で外來系土器と思われる。85の外面にはタタキ状の調整を施している。86はほぼ完形で、口径14.2cm、器高28.1cmを測る。短かく字状口縁と丸い胴部を有する。底部は不安定な平底である。87は長頸壺で、逆く字を呈する複合口縁を有する。88・89は壺であるが、88の底部には焼成後穿孔を施しており、概として用いられたのであろう。90は納壺に近い形状を呈す。平底で、胴部最大形が胴下半部にある。外面に赤色顔料の痕跡がある。91は小形の壺で、口径12.2cm、器高3.2cmを測る。92は高環の口縁部片で、端部はするどく内湾する。81は丸太材で、厚さ21cmを測る。図の左端部は丸く抉れる。

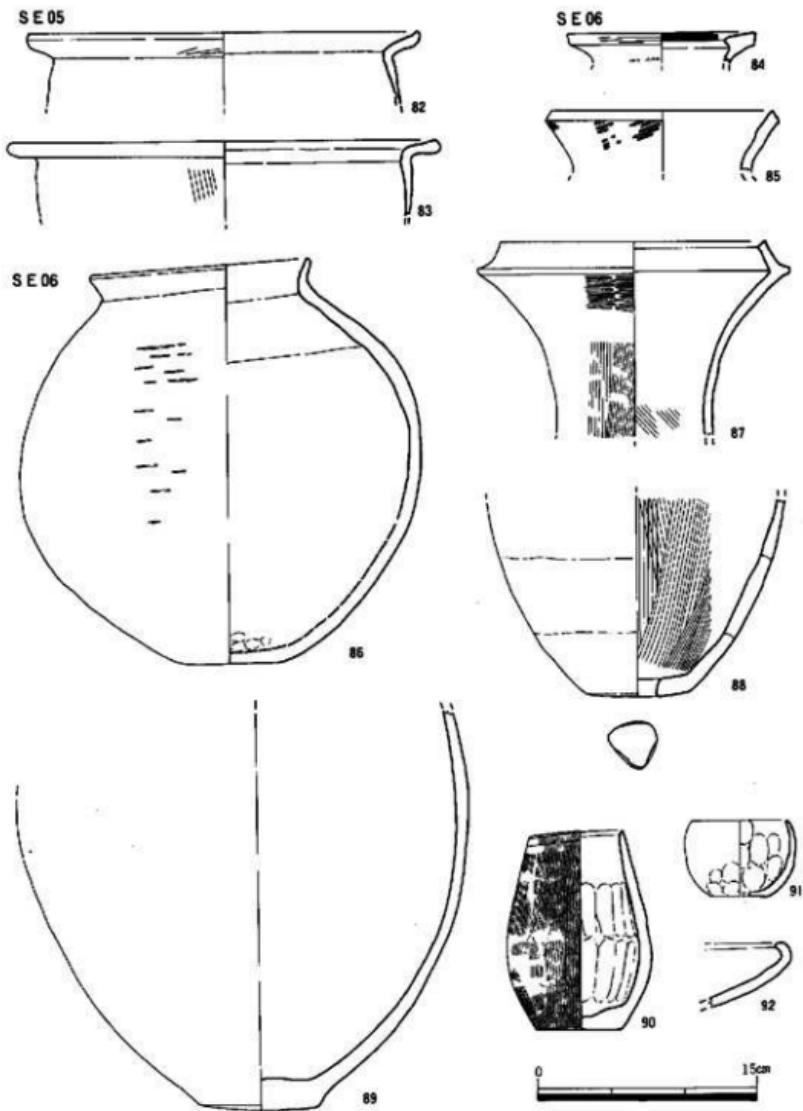
(米倉)

(3) 振立柱建物 (SB)

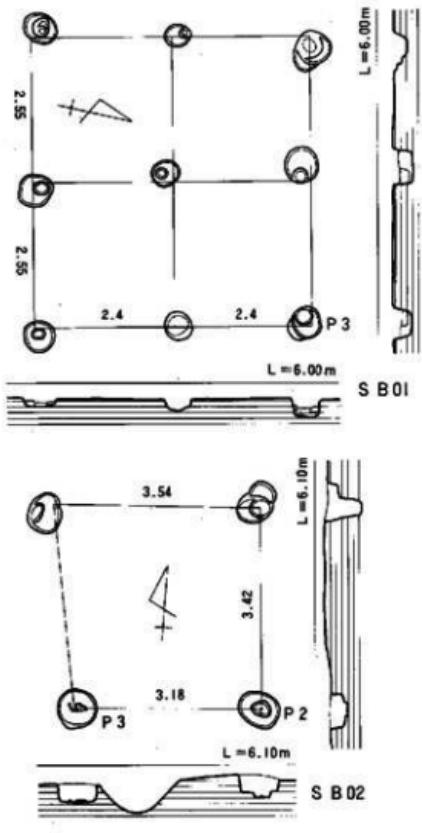
建物としてまとめたのは3棟である。他にもSK14のように礎板を持ったものや、直径が大きく、深く柱穴として考えられるものも多数あったが、調査区が狭いため建物としてまとめえなかった。桁行、梁間については上部構造が残存しないため本来なら断定は出来ないが、可能性として長軸方向を桁行、短軸を梁間と



第20図 SE 06 (縮尺1/40) 及び同出土遺物 I (縮尺1/8)



第21図 SE 05・SE 06出土遺物 II (縮尺1/40)



第22図 SB 01~03 (縮尺1/100)

(単位: cm)

規格	建 築	間 間		方 向	座標値 (m)	柱 穴						備 考	
		実 長(尺)	柱間寸法(尺)			柱	深	基	高	低	柱間距		
1号	2×2	510(17)	16.5 - 8.5	480(16)	8 - 8	N77°30'E	25.0	9	14~29	39~52	35~51	14~22	柱
2号	1×1	342(11.4)	11.4	318(10.6)	10.6	N 5°E	2.7	4	29~62	61~72	49~58	/	
3号	2×1	540(18)	9 - 9 ; 8 - 8	300(10)	10	N73°E	16.2	6	13~39	42~63	36~61	/	

表3 挿立柱建物一覧

から14~22cm位と考えられる。覆土は黒褐色粘質土か淡黒褐色粘質土である。

出土遺物（第23図、図版20） 5ヶの柱穴より出土しているがその量は少ない。ほとんど弥生式土器片で須恵器は含まない。細片で時期を決めうる遺物はない。

93は黒曜石の石鏃である。三辺に抉りがあり一見三菱型に似た形態である。全長1.8cm、重さ1gを測る。Pit 3より出土。

SB 02（第22図、図版11）

調査区北側で検出したSD 01をまたぐ形の、主軸方向をN 5°Wに取る1間×1間のややいびつな形の建物である。桁行全長3.42m（11.4尺）、梁間全長3.18m（10.6尺）を測り、柱間隔が大きい。柱穴掘り方径は60~70cm程度と考えられる。Pit 2・3には礎板と思われる木材片が残っていた。いずれも覆土はいずれも黒褐色粘質土である。

出土遺物 すべての柱穴から少しづつ出土している。弥生式土器片がほとんどであるがわずかに古墳時代前期の土師器片を含む。細片で図示出来ない。

SB 03（第22図）

調査区南側で検出したSD 01にまたがり、SK 05を切る、主軸方向をN 73°Eに取る。桁行2間×梁間1間の建物である。桁行全長5.4m（18尺）、梁間全長3.0m（10尺）を測る。柱筋はほぼ通るが北東隅柱が少しずれる。柱穴掘り方径は42~63cmと比較的大きい。柱径は一部に残る柱痕跡から12cm前後と考えられる。覆土はいずれも黒褐色粘質土である。

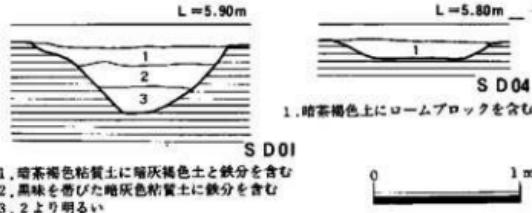
出土遺物 5個の柱穴より少しづつ出土している。弥生式土器片がほとんどであるが少量古墳時代土師器片を含む。細片がほとんどで図示出来ない。（山崎）

（4）溝状造構（SD）

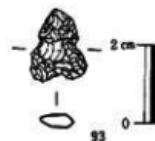
溝状造構は6条検出した。そのうちSD 01は包含層最上面、03・06は包含層下層の上面から掘り込まれている。SD 01の東半・02・04・05は南北方向に走り、ほぼ平行している。

SD 01（第24図、図版12）

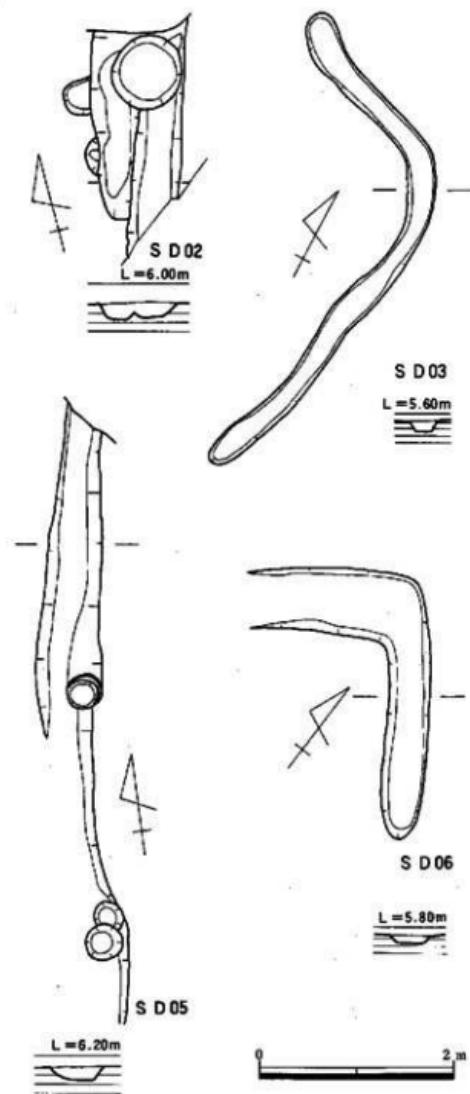
SD 01は調査区東側中央付近で矩形に曲がり、幅約1.3m、深さ約0.5mを測る。底の幅は0.2mと狭く、断面形はV字に近い逆台形を呈す。覆土は3層に分かれると、いずれも灰褐色粘質



第24図 SD 01-04 土層断面（縮尺1/100）



第23図 SB 01P-3 出土遺物
(縮尺2/3)



第25図 S D02-03-05-06(縮尺1/6)

土を主体とする。

出土遺物 (第26図、図版20) 弥生式土器、土師器、陶器、磁器、石器で、総量はコンテナ約1/2箱である。94は弥生式土器である。斐の底部片で、上げ底である。95は瓦器塊の底部片で、高台の断面形は丸味を帯びる。96は白磁の底部片で、外底部は露胎である。釉調は線がかった透明釉である。96は陶器で、燈明皿である。見込み等に褐色釉がかかる。98は摺鉢で、外面に乳白色のうすい釉を施す。条線は密である。100は砥石で、一部欠失する。砂岩製で、現存長6.5cm、幅6.6cm、厚さ3.3cmを測る。大きさから見て、手持ち用の砥石であろう。

SD 02 (第25図、図版13)

調査区南側、SD 01の屈曲部付近で検出した。SD 01に切られる。平面及び断面の状態から、平行する2本の溝が切りあっている可能性があるが、土層は全く変わらない。覆土は暗茶褐色土である。

出土遺物 弥生式土器が少量と、土師器、須恵器がごく少量出土したが、いずれも細片である。

SD 03 (第23図、図版13)

包含層下層上面から掘り込む。全体が矩形に曲がるが、屈曲部は丸味を持つ。北側の長さ2.4m、南側の長さ3.6m、最大幅0.35m、深さ0.15mを測る。

出土遺物（第26図、図版20） 弥生式土器片が少量出土した。99・101は弥生式土器で、腰の口縁部片である。99はT字形に近い逆L字を呈する。101はく字形を呈する。

SD04（第24図、図版12）

調査区南東側、SD 01の東約2.0mで検出した。SD 01に平行し、南北に走る。幅約1.1m、深さ約0.1mを測る。覆土は暗茶褐色土である。

出土遺物 弥生式土器が約100点出土したが、いずれも細片のため図示し得なかった。

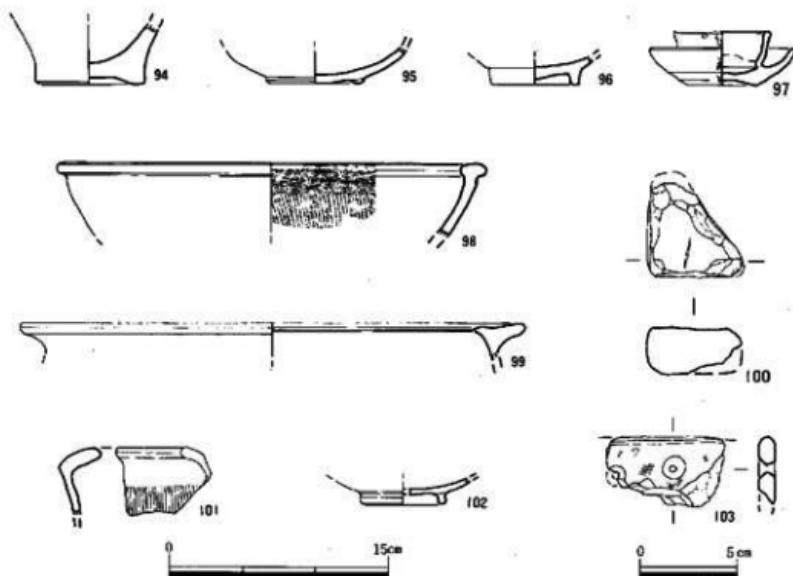
SD05（第25図、図版12）

SD 04の東側、約3.5mで検出した。SD 01・04に平行して、南北に走る。もっとも深いところで約10cmの深さしかない。覆土は暗茶褐色土である。

出土遺物 弥生式土器の細片がごく少量出土したが、図示し得なかった。

SD06（第25図、図版13）

調査区中央の北西側で検出した。包含層下層上面から掘り込む。ほぼ直角に曲がる。調査区のI区とII区にまたがるが、深さ10cm以下と浅いため、I区では検出しきれなかった。覆土は黒灰色粘質土である。

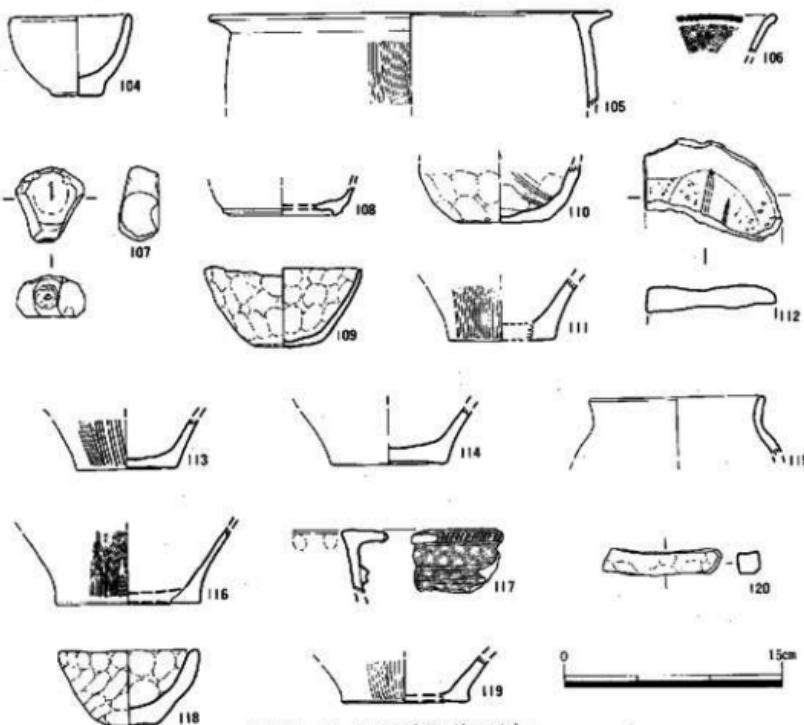


第26図 SD 01-03-06出土遺物（縮尺1/3, 1/4）

出土遺物（第26図、図版20） 弥生式土器の細片少量と、瓦器・須恵器等片がごく少量出土した。102は瓦器の底部で、底径5.2cmを測る。高台の高さは0.7cmを測り、断面形は丸味を帯びた台形に近い。103は小豆色輝緑凝灰岩製の石庖丁片である。厚さ0.8cmを測る。2孔は平行していない。
(米倉)

(5) ピット出土遺物（第26図、図版14・20）

調査区内で検出したPitは全部で255個であるがその内110個のPitより遺物が出土した。出土した遺物は大半が土器片で弥生式土器から古墳時代土器、須恵器などである。ほとんどが細片であり、図示出来るものが少ないが、中にはPit 7のように完形品が出土したものもある。又、Pit 86から炭化米が約30粒程出土している。長さ5mm、直径2mmでジャボニカと思われるが専門的な分析はまだ行っていない。
(山崎)



第27図 ピット出土遺物(縮尺1/4)

104は鉢である。弥生時代中期末に位置づけられる。器表面は全体に磨滅がひどい。Pit 7出土。105は弥生式土器の腹口縁部片で、逆L字形口縁を呈す。Pit 27出土。106は須恵器の口縁部小片で、外面に横描波状文が施される。107は小型の砥石又は叩石と考えられるものである。上下両面、左右両側片が底面、下端が叩石として使用されている。現存長5.2cmを測る。色調はくすんだ灰色で、石質は目の細かい砂岩である。106、107ともにPit 33出土。108は須恵器で低い高台のつく壺の小片である。Pit 42出土。109は手づくねの鉢で、指おさえ痕が明瞭に残る。110は壺であろうか。109、110いずれも弥生式土器でPit 44出土。111は弥生式土器の腹底部片、外面はタテのハケメ調整。Pit 57出土。112は砥石の小片で、使用痕跡が明瞭に残る。色調は少し褐色味を帯びた灰色で、石質は目の細かい砂岩。Pit 57出土。113、114、116は弥生式土器の腹底部片である。113はPit 70、114はPit 73、116はPit 89出土。115は土師器壺の口縁部片である。直立する口縁部である。Pit 83出土。117は弥生式土器の腹口縁部片である。丹塗で口縁端部には刻目が施される。Pit 101出土。118は弥生式土器の手づくね鉢である。指おさえ痕が明瞭に残る。Pit 102出土。119は弥生式土器は腹底部片である。Pit 114出土。120は用途不明で、断面長方形の棒状の石器である。調整は余り丁寧にされていない。現存長8.2cm、最大幅1.5cmを測る。色調は淡白灰褐色で、頁岩質の石材を使用する。

(山崎)

(6) 包含層(図版14)

調査区西側底地部を中心に包含層が存在する。その範囲は約200m²である。包含層は西側隅に向って深くなり、その最大厚は65cmを測る。堆積状況は大きく上・中・下の3層にまとめられる事が出来る。上層は暗茶褐色土を主体とする層で、弥生時代中期から古墳時代須恵器片迄を含む。その厚さは10~15cmである。中層は灰褐色土(シルト質)を主体とする層で、粗砂礫を含んでいる。古墳時代の遺物も含むが、弥生時代中期から後期の土器片を特に多く含む。その厚さは15~35cmである。下層は黒色土を主体とする層で、弥生時代中期中頃から後期はじめ須の遺物を含む。その厚さは10~30cmである。

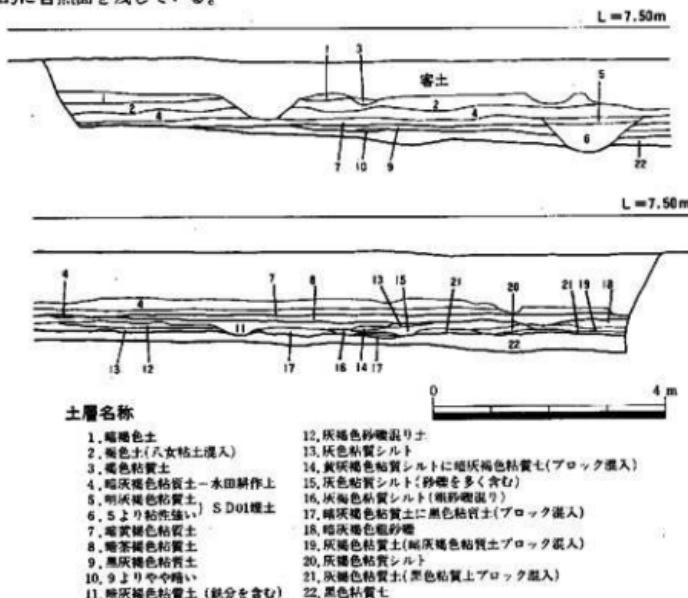
遺物は出土量は多くコンテナにして30箱、大半が土器片である。特に上層、中層を中心に出土しており、上層からは馬齒も出土している。上層は区面整理によって削平されているものの整地面と考えたい。

包含層上層出土遺物(第29図、図版20)

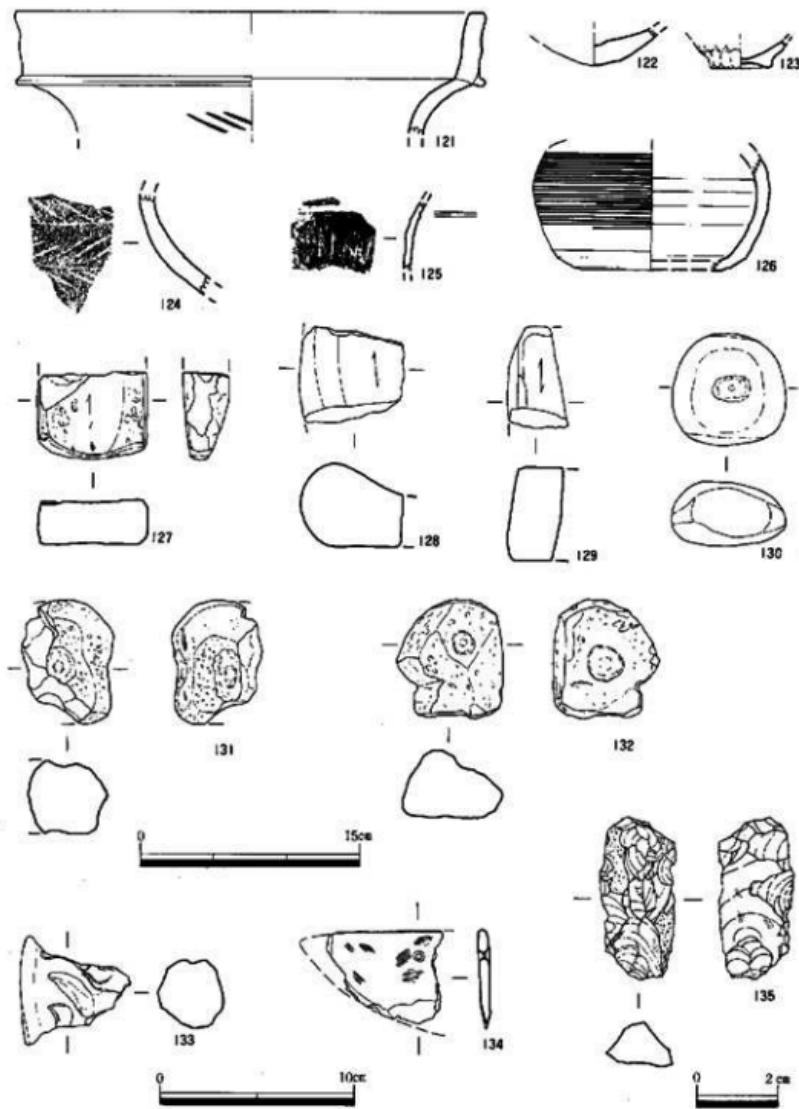
121、122、124は土師器である。121、124はいわゆる山陰系土器といわれる複合口縁壺の口縁部と口頸部片である。122は底部片である。120、121と色調は同じで、底部片の可能性がある。小片で器種は不明。123は弥生式土器の底部片で、中央がややあげ底である。125、126は須恵器である。125は壺か甌の口頸部片である。外面に横描波状文が描かれる。126は平底の体部片、体部上面はかき目、体部下半は回転ヘラケズリである。127~129は砥石で、いずれも破

片。127は上下両面と左側面が砥面として使用される。現存長6.0cmを測る。128は上面が砥面として使用される。他面は研磨仕上である。現存長は6.7cm、現存幅は7.2cmを測る。129は上面を砥面として使用、他面は丁寧な研磨仕上である。色調は127が淡黄灰褐色、128が淡褐灰色、129が黄褐色である。130は磨石である。平面形は不整円形を呈す。全面が使用によってひどく磨滅を受けている。上面には使用による敲打痕が残る。最大幅7.8cmを測り、色調は淡灰褐色、石質は玄武岩である。131、132は四石である。131は上下両面が使用により凹む。全体に調整は粗い。現存長8.6cmを測る。132も上下両面に使用痕を残す。右側辺は研磨調整を受けているが、他面はあまり丁寧な調整を受けていない。現存長8.3cmを測る。色調は131が暗赤褐色、132が暗灰褐色。石質は131が安山岩、132が砂岩と思われる。133は、把手状の土製品で、完形品である。全長5.7cm、平坦部の直径5.5cmを測る。平坦部は丁寧なナデ、その他は荒い指ナデ調整を施す。色調は黄白色を呈する。134は石庖丁である。小片で全体の形状はわからない。外湾半月形と思われるもので、一ヵ所の紐通し孔が残っている。刃部は両面より研ぎ出される。色調はややくらいい灰色。石質は粘板岩である。また石庖丁は、他にも輝緑凝灰岩製の小片が1点ある。135は黒曜石の剥片である。全長4.2cm、最大幅1.9cmを測り、断面形は三角形を呈す。部分的に自然面を残している。

(山崎)



第28図 調査区南西壁土層断面図(縮尺1/100)



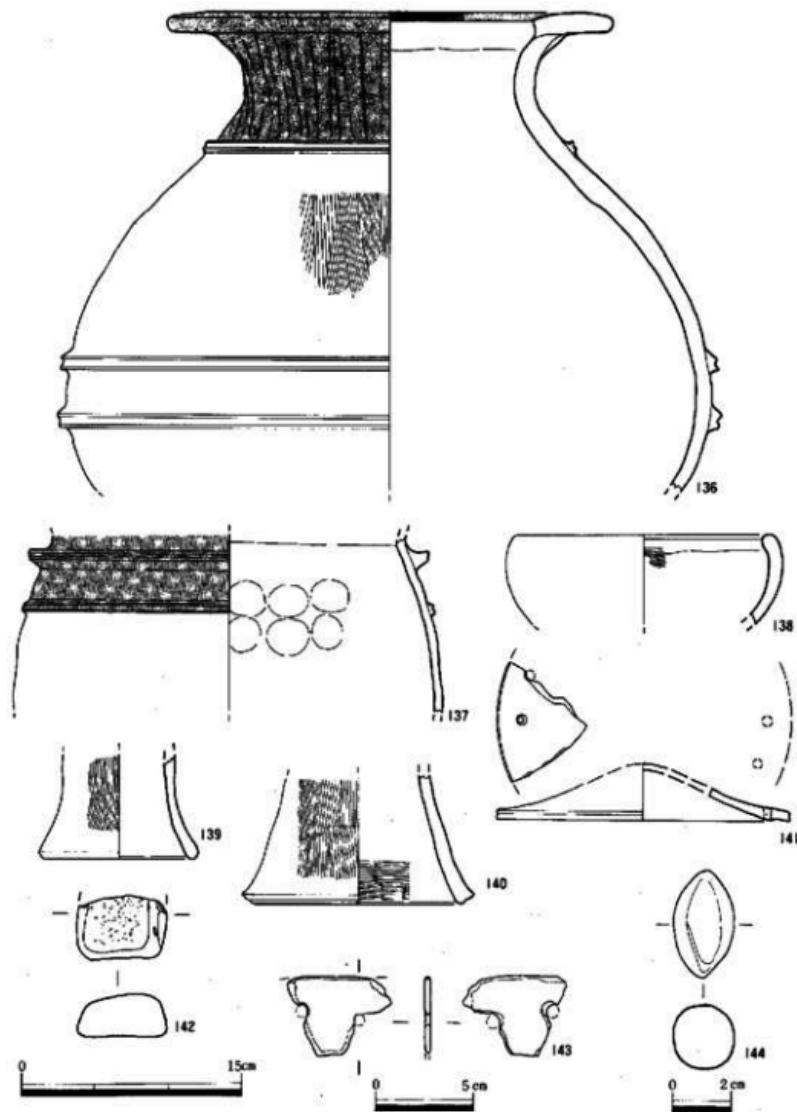
第29図 包含層上層出土遺物(縮尺2/3, 1/3, 1/4)

包含層中層出土遺物（第30図、図版21）

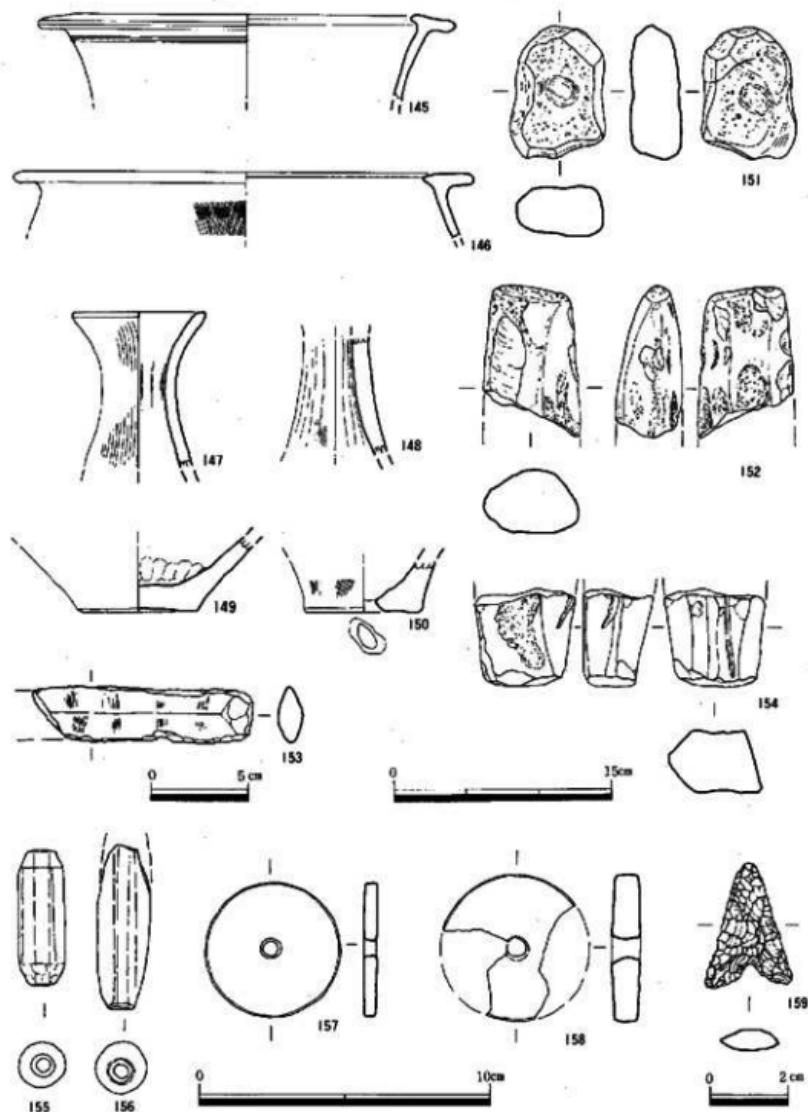
中層からは弥生式土器、投弾、石器が出土した。136～141は弥生式土器である。136は壺で、口縁部は逆L字に近い形態を呈する。頸部から胴部は丸味を持つ。頭部に1条、胴部に2条の断面M字の凸帯を貼りつける。また口縁部から頸部に暗文を施す。137は甌で、頭部の下に、断面M字の凸帯を2条貼りつける。外器面には赤色顔料を塗付している。138は钵で、口縁部は内溝し、口唇部は丸くおさめる。139・140は器台の底部片である。139は底部先端が丸味を帯びているのに対し、140は平坦面を作る。また139はくびれ部が弱い屈曲部にあるが、140は底部からゆるやかなカーブを描いている。141は蓋で、残存破片中に2個の経通し穴が確認できる。復元径20.2cmを測る。142は土製品で、投弾である。全長3.7cm、幅2.0cm、14gを測る。断面形は円形というよりは、むしろ隅丸方形に近い形状をなす。142は玄武岩製の磨石である。欠損している。最大幅6.0cm、最大厚3.0cmを測る。四面とも使用によって磨滅している。143は石庵丁で、粘板岩を使用している。2孔は平行していない。厚さ0.3cmを測る。

包含層下層出土遺物（第31図、図版21）

下層からは、弥生式土器、土鍤、凹石、石斧、砥石、石鎌、石製紡錘車が出土した。145～150は弥生式土器で、145はいわゆる鋤先口縁に近い形態をなす。壺である。口縁直下につまみ出しによる凸帯部を作り出す。146は逆L字口縁を呈し、甌である。147は器台、148は高坏の簡部である。149は壺の底部、150は甌の底部であるが、150の底部中央には焼成後穿孔を加えており、懶であろう。155・156は土鍤で、155は全長4.7cm、幅1.5cm、孔の直径0.5cmを測る。両端は面取りしている。156は幅1.8cm、孔の直径0.5cmを測る。151は砂岩製の磨石兼凹石である。一部欠損している。152は磨製石斧で、下半部を欠損している。玄武岩製で、幅6.7cm、厚さ4.6cmを測る。153は石剣で、輝緑凝灰岩製である。断面形は砲弾状を呈す。幅2.9cm、厚さ1.3cmを測る。154は砂岩製の砥石で、ほぼ全面を利用しているが、表裏2面には利用による条痕が縱方向に残る。157・158は紡錘車で、157は径4.7cm、厚さ0.45cm、重さ19gを測る。158は径5.0cm、厚さ1.0cmを測り、157よりかなり厚い。ともに砂岩製である。159は黒曜石製の石鎌で、全長3.2cm、重さ2gを測る。



第30図 包含層中層出土遺物（縮尺1/2, 1/3, 1/4）



第31圖 包含層下層出土遺物 (縮尺2/3, 1/2, 1/3, 1/4)

第4章 まとめ

以上今回の調査概要について述べたが、ここでは不十分ではあるがそれらを総括して若干のまとめを行ないたいと思う。今回検出した遺構の時代は大きくまとめると4時期に分ける事ができる。I期は弥生時代中期後半から後期にかけて、II期は古墳時代初頭頃、III期は鎌倉時代、IV期は近世である。

I期の弥生時代の遺構は比較的多く、土壇ではSK03・04、井戸ではSE05・06が代表として上げられる。SK03・04は弥生時代中期から後期初め頃までの遺物を含む。特にSK04は後期初頭に位置づけられる腰棺を含む多量の遺物が覆土上層を中心に廃棄されていた。SE05・06は出土遺物から後期に属す。SE05は後期前半、SE06は後期後半の初め頃に位置づけられる。SE05・06はいずれも素掘の井戸である。比恵遺跡群では現在の所、総数123基以上の井戸が検出されており、弥生時代後期の井戸が82基と最も多く確認されている。この時期に比恵遺跡が最も繁栄した事が想像出来る。またSE06からは第21図84・85のように器形や、90のような一見タコ壺を思わせる土器も出土しているが、近くに類例を見い出せない。タコ壺形土器については外面に赤色顔料が残っている事から、井戸祭祀に関連するものかもしれない。

II期の古墳時代はSE04を代表とする事が出来る。SE04は一見テラスを持つ2段掘りの井戸であるが、遺物は井戸中央に集中しており、その部分の覆土と周囲の覆土がまったく異なり、木質の井筒が存在したと考えられる。井筒内から多量の古式土師器が出土している。器種としては壺3、小型丸底壺3、複合口縁壺3、高壺4、斐11、塊1、鉢1などと一応すべてそろい、完形品が多く良好な資料である。在地形土器と外来形土器の山陰系土器といわれる複合口縁壺、布留式系土器の壺、小型丸底壺などが混在している。複合口縁壺は胎土自体在地系土器と異なる。また布留系の壺は非常に器壁が薄く、焼成も良好である。胴上部にヘラ焼きの文様を持つものがある。これらの諸様相を考えると、藤田氏の山陰系土器の編年のV期、柳田氏のIIb期に概当し、従来の編年観と矛盾しない。共伴関係である。

III期の鎌倉時代は、SE02、SD06がある。SE02は2段掘りの素掘りの井戸である。出土した白磁が大宰府編年の白磁IV-1、V-2類にあたる事、青磁片を含むこと、瓦器塊が比較的粗雑な造りで体部下半に指おさえ痕を明瞭に残す特長を持つ事などから13世紀前半から中頃が考えられる。SD06もSE02と同様の高台を持つ瓦器塊片が出土しており同時期と考える事が出来る。SE02出土の石錘は凹石を転用したものであるが、タテ・ヨコの十字に紐ずれ痕があり、平川敬治氏（九州大学研究生）によれば小型のはえなわ漁に用いたものであろうという事である。今回の調査では漁撈具が土錘2点、石錘3点出土しており、那ノ津のほとりにつくられた那津官家との「日本書紀」の記述と考え合せて、那珂川の水運を利用した漁撈が行われていた事が考えられる。

IV期の近世はSD01のみである。SD01は土層観察によれば現代水田土直下より始まり、包含層を切りどの遺構よりも新しい。遺物も近世陶磁器などを含む。覆土の状態から考えて、恐らく区画整理以前の溝と考えられる。

掘立柱建物、及び包含層の年代であるが、掘立柱建物については、3棟検出している。それぞれ大きさは異なるが斜面に直交する方向ではほぼ同じ主軸方向を取る。又、柱穴からの遺物は弥生式土器と少量の土師器片しか出土しておらず、須恵器片を含まない事から古墳時代前期の可能性がある。SB02の柱穴掘方からは礎板らしき木片が出土している。比恵遺跡群では第6次、7次調査でも礎板を持った建物が検出されている。福岡市内の他遺跡では礎板の検出された例が板付・湯納遺跡以外あまり知られておらず興味深い所である。包含層は大きく3層に分ける事が出来るが、上層は整地層と考えられる。その整地層の時期については、遺物が弥生から古墳時代の須恵器迄しか含まない為はっきり出来ないが、その下層上面より切り込む溝SD06が瓦器塼を含む事などから、それより後の時期と考えられる。中世以降の整地層と考えたい。

あとがき

福岡市内で最初に行なわれた考古学手法による発掘調査は、昭和4年から5年の比恵遺跡の調査でした。土地区画整理に伴なったこの調査は、比恵遺跡の名を高めたと同時に、比恵台地の開発への序曲でもありました。戦後、都心に近く、交通の便がよいという地理的条件に恵まれた比恵遺跡の周辺の宅地化が進みすっかり市街地化しました。しかし、ここ数年、福岡市が九州の中枢管理都市としての発展をつづける中で、今度は都市再開発の波がおしよせ基礎の浅い木造住宅に代わって、背の高い鉄筋ビルへと変化しつつあります。このような歴史の中で、比恵遺跡の調査が行なわれ、環溝集落の存在、日本最古（当時）の網を巻いた細形銅剣の出土、日本書記にある「那津官家」と見られる遺構群と数多くの話題を呼びました。しかし現在それらの遺跡もほとんど保存されることなく、コンクリートの基礎の下に埋もれて往古の姿も露となって消えきってしまいました。今回の調査がその歴の一しづくでもすくいあげられたなら幸いです。

最後になりましたが、今回の調査・報告書の作成にあたりましてはモロゾフ株式会社福岡支店の皆様をはじめ多くの方々の御協力によっているという事を記し、お礼を申し上げます。

(山崎、米倉)

表4. 土器無機表

(1)

遺物名	No.	種類	基準	器部	法量 (m)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SK02	1	茶生	裏	口縁部片	復元口徑22.6	{外}縫合がひどく継接不明 {内}頂上(ねづみ底部のみ)	1~2mmの砂粒を含む	普通	{外}明褐色 {内}やや暗い 黄褐色	
	2		x	口縁部片		内外面とも横ナテ	砂粒を多く混入	良好	表面とも 明褐色	
SK03	3	茶生	裏	口縁部片	復元口徑23.2	{外}横ナテ、黑色顔料による模文あり {内}横ナテ	砂粒を多く含む	x	表面とも 明褐色	
	4		x	肩部片	凸唇部底面	{外}へりとガタ?赤色顔料付 {内}網目不明	1mm以下の石英・長石・金雲母・砂粒混入	x	{外}淡褐色~ 明褐色 {内}淡黃褐色~ 淡褐色	
	5	x	裏	口縁部片	復元口徑25.5	口縁部は横ナテ {外}網目・ケ {内}ナテ	1mm以下の石英・長石・金雲母・砂粒混入	x	{外}淡褐色 {内}暗赤褐色	
	6	x	裏	底部	底径 7.3	{外}横ナテ {内}ナテ、並列縫隙に指跡痕	1~2mmの石英・長石・金雲母・砂粒混入	x	{外}暗黃褐色 {内}淡褐色	
SK04	9	茶生	並	口縁部	口徑13.6	{外}口縁部は横ナテ、内部はヒゲキ、 赤色顔料付 {内}ナテ	1~3mmの石英・長石・金雲母・砂粒混入	普通	{外}暗赤褐色 {内}淡褐色	
	10	x	x	底部	底径 9.4	{外}横方向の跡 {内}網目がひどい不明	2mm以下の石英・長石・金雲母・砂粒混入	x	{外}暗赤褐色 {内}淡褐色	xと同一個体
	11	x	底	口縁部片	復元口徑30.7	内外面ともナテ	1mm以下の石英・長石・金雲母・砂粒を含む。粗い	良好	{外}淡黃褐色 {内}褐色	
	12	x	裏	底部片	底径 7.2	内外面ともナテ 並列内面のみ・横ナテ	2mm以下の石英・長石・金雲母・砂粒を含む。中や粗い	普通	{外}淡褐色 {内}淡黃褐色	
	13	x	x	x	底径 7.2	内外面とも網目不明 ナテ?	3mm以下の石英・長石・金雲母・砂粒を含む	良好	{外}淡褐色 {内}表面に黒斑 あり	
	14	x	x	x	底径 9.6	内外面ともナテ 内部に一箇所始点ある	3mm以下の石英・長石・金雲母・砂粒を含む	x	表面とも 明褐色	
	15	x	裏	口縁部沿線	復元口徑22.3	{外}縫合の跡+ハケ、柄ハケ {内}網目+横ナテを施し、柄ハケ	石英・長石・高嶺石を含む	普通	表面とも 明褐色	
	16	x	x		口徑25.2	{外}網ハケ+ナテ施し ナテ?	1mm以下の石英・長石・金雲母等をやや多く含む	良好	{外}淡褐色 {内}やや暗褐色 かかった 淡褐色	
	17	x	x	口縁部沿線	復元口徑29.0	{外}網ハケ、口縁部はナテ {内}ナテ(深窓)、側起きの板が残る	砂粒を多く混入	x	{外}ややくす んだ褐色 {内}淡褐色	
	18	x	x		口徑19.9	口縁部は横ナテ {外}網+ケ {内}斜めハケ	3mm以下の石英・長石・金雲母・砂粒を含む	普通	表面とも 淡黃褐色	
	19	x	x	口縁部沿線	復元口徑23.2	{外}網ハケ、口縁部は横ナテ {内}ナテ	純 灰	やや 甘い	{外}淡褐色 {内}淡黃褐色	
	20	x	x		直徑 8.0	{外}網ハケ {内}ナテ	1mm以下の石英・長石・金雲母を含む	良好	淡黃褐色~淡 赤褐色で全体 に黒っぽい	
	21	x	x		直徑 8.0	{外}網ハケ、やや垂滅のため不良 {内}器底の陥没のため不明	2mm以下の石英・長石・金雲母を含む	やや 甘い	{外}淡褐色 表面に黒斑 あり	
	22	x	x		直徑 8.0	{外}網ハケ、一帯径10~12mm後 {内}ナテなし	1mm以下の石英・長石・金雲母を少量含む	良好	淡黃褐色 表面に黒斑	

直口縁部付は、内面をはかった。

造納名	No.	種類	器種	着色	法量 (cm)	手 法 の 特 徴	胎 土	焼成	色 調	備考
SK 04	23	祭 生	盤	赤 部	底径16.4	(外)輪ハケの後、脱灰上漬による褪ナダ (内)ナダ?	精 精 石英の小粒を含む	やや 甘い	(外)淡褐色 (内)質白色	
	24	*	盤	ほぼ完形	口径27.3 脚高19.1	(外)輪ハケ、口輪部は焦ナダ (内)やや丁寧なナダ	2mm以下の石英 砂粒を含む	良好	淡褐色 外周に黒斑	
	25	*	高 相	口輪部	復元口径17.3	丁寧なナダ	裏面の小片、白 色の粒子を含む 砂質	*	両面とも淡褐色 の二三次色 顔料を半分	同 様性?
	26	*	*	筒 部		無色 (外)輪取不明 (内)シボリ	金雲母、白色粘 土のごく細片を 含む	*	両面とも淡褐色 がかった浅褐色、 外周に 赤色顔料	
	28	*	器 内	口輪-脚部	復元口径30.5	(外)輪ハケ、口輪部は焦ナダ (内)ナダ、口脚部は焦ナダ	2mm以下の石英 砂粒、金雲母を 含む	*	墨ずんだ 灰褐色	
	29	*	*	口輪-脚部	口径 8.2	(外)輪ハケ、口輪部は焦ナダ (内)ナダ+シボリ	1mm以下の石英 砂粒、金雲母を 多く含むや粗	*	陶土とも 同灰褐色	
	30	*	盤	口輪足部	復元口径43.4	(外)輪ハケ、口輪部は焦ナダ (内)ナダ、ロ脚部指紋底	石英、長石粒 1 ~3mm程度を多 く含む	*	(外)暗褐色 (内)部分的に 黒変する	
SK 09	31	祭 生	器 古	脚 部	腰径 7.0 最大高 8.1	(外)ナダ (内)上部断面ヨリ、ケズリーナダ	1mm以下の石英 砂石、金雲母を 少々含む	良好	(外)淡褐色 (内)淡黃褐褐色	
SK 10	32	祭 生	盤	実物片	底径 9.2	(外)玄面が黒味し、調合不明 (内)糊おとえが残る。	砂粒を少量含む	普通	(外)灰褐色 (内)灰褐色 (内)明褐色	
SK 12	33	祭 生	器	底部切	底径 7.2	(外)脚ナダの後、輪ハケ (内)輪取不明、ナダ?	石英、砂粒を多 く含む	*	(外)小輪味がか った灰色 (内)淡褐色	
	34	*	*	口輪脚部片	復元口径21.2	(外)7-8本乳頭の輪ハケ、口輪部は 焦ナダ (内)ナダ	石英、砂粒を含 み、金雲母の薄 片を少量含む	良好	(外)高いピンク色 (内)乳白色を おりビンゴ色	
	35	痕 感	坏 壁	天井脚部片		(外)輪ナダ、凹部へラッキリ (内)不整ナダ、糊ナダ	砂粒をやや含む	*	(外)灰色 (内)ややす んだ灰褐色	
	36	*	坏 壁	口輪足部片	復元口径11.2 脚 高 4.9 足 部 径 13.8	(外)脚部へラッキリ、凹部ナダ (内)不整なナダ		*	灰褐色とも 青褐色	
	37	*	壺	口輪足部片	復元口径19.6	(外)凹め上方の細い取手のちナダ (内)輪ハケと合む?ナダ	精 良	*	陶土とも 淡褐色	
SE 02	38	瓦 盆	壺	沿縁体	復元口径15.3 脚 高 5.0	(外)ナダ、指輪底あり (内)脚部不整	精 精 赤褐色粒子を含む	*	(外)明灰褐色 (内)明褐色	中 等
	39	*	*	底部5片	底径 6.0	(外)ナダ、底部は焦ナダ (内)底部工具によるナダ	精 精	*	淡褐色 上部は灰褐色 兼し灰色	中 等
	40	*	*	底部5片	底径 7.3	(外)ナダ、板目が残る。 (内)丁寧なナダ	精 精	*	陶土とも 淡褐色	
	41	*	*	底部片	底径 6.6	(外)輪ナダ (内)丁寧なナダ	精 良	やや 甘い	陶土とも 淡褐色	
	42	白 瓦	*	口輪脚部片	復元口径29.2	ロクロ熟成	精 精 灰白色	良好	やや味がかった 透明の乳白色	
	43	*	*	口輪脚部片	復元口径33.4	ロクロ熟成	精 精 白色	*	やや味がかった 透明味	

種別名	No.	種類	器種	器部	法 量 (cm)	手 法 の 特 徴	地 土	性 能	色 調	備 対
S E 02	44	白 磷	块	口端片	復元口徑15.7	ロクロ調整 焼きハゼカリ	精 美 灰白色	良好 平歛	やや緑がかった 乳白色地が 多くかかる	
	45	*	*	底 部	高台部径 7.5	ロクロ調整 見込みに磨痕あり	精 美 灰白色	良好	緑がかった透 明白、高台部 は灰白色	
S E 04	51	革 生	体	腹部周	確定口徑20.0 確定高さ10.5	表面ともナナ	砂粒を多く混入 (外)灰白色 - (内)白灰色	普通	(外)暗赤褐色 (内)少し青い 茶褐色	
	52	七 鮮 鮫	小型丸底	壳 形	口径10.5 高度 9.7	(外)縫隙不明、頭部はハケの後ナナ (内)口端部はハケの後ナナ、頭部ヘタ ナズリ	砂粒を少量含む	*	表面とも 明褐色	下 層
	53	*	殻	略先形	口径15.2 高さ31.5 頭部最大径25.9	(外)頭部と表面とも模ナナ (外)頭部はハケ、頭部部はカゼリ + (内)ハケの後ナナ	2mm以下の石英 ・金雲母・砂粒 を含む	やや 青	(外)淡褐色 ・明褐色 (内)墨灰色、 深褐色	(上層)
	54	*	小型丸底	壳部のみ 欠失	口徑 10.9 確定高さ 9.8 确定最大径11.4	口端部模ナナ (外)端ヘイナナ (内)ナナ	精 美	普通	表面とも明確 な明褐色地	下 层
	55	*	殻	略先形	口徑 12.5 确定最大径13.7 高度 10.75	表面とも丁寧なナナ	砂粒、金雲母を 含む	良好	(外)黄白色～ 明褐色 (内)明褐色	(上層)
	56	*	*	口端部	口徑20.3	(外)日本半島の海ハケ、白骨あり (内)新潟県のハケ。難讀あり	1~3mmの砂粒 を多く含む	普通	(外)面白い乳 白色(部分的) (内)白骨あり (内)明褐色	中 层
S E 04	57	*	長 扇 壳	略先形 のみ欠失	脚径 15.3 成育高 18.7	(外)脚部は模ナナ、頭部は模ハケ (内)脚部は模ハケと電子あり 頭部は模ハケ	精 美	良好	表面とも 明褐色	
	58	*	殻	口端部	口徑25.2	(外)ナナ (内)頭部のみ模ハケ、他は模ナナ	2mm以下の石英 ・金雲母・砂粒 を含む	*	表面ともやや 褐色を帯びた 黄白色	
	59	*	*	口端部	口徑13.7	(外)表面ともナナ (内)端部のため平面	石英・チャート 砂粒を含み。や や粗い	*	表面ともやや 褐色を帯びた 黄白色	
	60	*	*	略先形 (底部欠失)	口徑 22.5 脚部最大径37.0 復元高さ約44.0	(外)口端部一側上部は模ナナ、以下平 面ハケ (内)口端部模ナナ、頭部カズリナナ	3mm以下の石英 ・チャート砂粒 ・金雲母を含む	やや 青	表面とも 白色	
	61	*	壳	壳 形	口徑 14.3 脚部最大径20.0 復元高さ 19.5	C脚部は模ナナ (外)ハケと、半使状の脚部 (内)ハラクエリ、頭部はナナを加える	1mm以下の石英 ・チャート・砂粒 ・金雲母を含む	良好	(外)淡褐色 ・スズベニ (内)黄褐色	下 层
	62	*	*	口端～ 脚部	復元口徑 14.8 脚部径 19.5	L脚部は模ナナ (外)ハケと (内)ハラクエリ	5mm以下の石英 ・砂粒・金雲母 を含む	*	表面ともやや 白い質感 スズベニ	*
S E 04	63	*	*	口端～ 脚部	復元口徑14.8 脚部径 19.5	白脚部は模ナナ (外)ハケと (内)脚部不明	5mm以下の石英 ・チャート・金雲母 ・砂粒を含む	*	(外)淡褐色 ・スズベニ (内)黄褐色	上 层
	64	*	*	口端～ 脚部	復元口徑10.2 脚部径 20.0	白脚部は模ナナ (外)ハケと (内)ハラクエリ	3mm以下の石英 ・チャート・金雲母 ・砂粒を含む	*	(外)灰褐色 ・角色・黒 褐色	
	65	*	*	口端～ 脚部	復元口徑15.2	口端部は模ナナ (外)ハケと (内)ハラクエリ	1~3mmの石英 ・金雲母等を多 く含む	良好	(外)黄褐色 ・白骨色～ 灰褐色	
	66	*	*	口端～ 脚部	復元口徑16.1	口端部は模ナナ (外)ナナと底灰 (内)ハラクエリ	2mm以下の石英 ・砂粒・金雲母 を含み。やや 粗い	*	(外)灰褐色 ・角色 (内)灰褐色 ・淡褐色	中 层
	67	*	*	強化～ 脚部	軸部最大径18.2	(外)脚部は模ナナ、頭部はハケ (内)脚部は模ナナ、頭部はヘテケズリ	2mm以下の石英 ・砂粒・金雲母 を含む	普通	(外)黄褐色 ・白骨色 (内)灰褐色 ・灰褐色 ・灰褐色	下 层
	68	*	*	口端部～ 脚部	復元口徑 16.9 脚部最大径23.7	(外)模ナナ、ハケと (内)模ナナ、ケズリ	3mm以下の石英 ・砂粒・金雲母 を含む	*	(外)黄白色 ・(内)褐色 (内)灰褐色	*

造形名	No.	種類	基準	部	法量 (m)	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
S E 04	69	土器	底	脚部~底部		(外)ハケ (内)ヘラケナダ	3mm以下の石英砂粒、金雲母を含む	良好	(外) 黄色 (内) 淡青色	下層
	70	*	*	脚部~底部		(外)ハケ (内)ヘリの複数ナゲ	3mm以下の石英砂粒、含云母を含む	*	(外) 淡青色 (内) 黄色	
	71	*	*	脚部~底部		(外)ハケ、沈みあり (内)ヘラケナダ、溶ナマ底あり	3mm以下の石英砂粒、含云母を含む	*	(外) 淡青色 (内) 黄色	下層
	72	*	塊	块定形	口径11.9 底径 3.2	(外)ナダ (内)丁寧なナダ	精良 含云母、チャートを含む	やや 悪い	表面とも 淡青色	
	73	*	台付塊?	底部	底径 9.4	(外)造型不規 (内)ナダ?	精良	普通	表面とも 淡青色	
	74	*	体	块定形	口径11.5 底径最大径12.0 高さ 6.0	表面とも丁寧なナダ	精良 含云母を含む	良好	表面とも 淡青色 外腹スリラ	
	75	*	高环	底部		(外)脚ハケの邊、轍の上がち (内)シムリナダ	精良 含云母を含む	*	(外) 淡青色 底面あり (内) 淡青色	最下層
	76	*	*	筒形		(外) 壁ナダ (内) 上部はナダり、下部はナダ	石英、砂粒、含云母を含む	*	表面とも 淡青色	上層
	77	*	*	脚部~ 脚部		(外)脚部は筒形の壁ナダ、 底部ナダ (内)脚部はシカリ、底部は壁ナダ	石英、砂粒、含云母を含む	*	表面とも 淡青色 赤鉄紅色付	下層
S E 05	78	*	唇	环下半 ~底部		表面とも底面がひどく造型不規	砂粒を多く混入	普通	表面とも 淡青 淡青色	
	79	*		底部片	底径14.7	(外) 壁ナダ (内) 造型不規	石英粒を若干含む	*	(外) 淡青色 (内) 淡青色	最下層
	80	体	生	口縁	口縁5片	復元口径26.5	(外)脚部ナダ (内)ナダ?	*	(外) 淡青赤褐色 (内) 淡青色	
S E 06	81		*	口縁	口縁5片	復元口径26.5	(外)脚部ナダ (内)ナダ?	精良	*	(外) 淡青色 (内) 淡青色
	82	体	生	口縁	口縁5片	復元口径13.0	(外) 口縁部はハコとナダ (内) 口縁にナダ、底に側ナダ	3mm以下の石英砂粒、含云母を含む	やや 悪い	(外) 淡青色 (内) 淡青色
	83	*	*	口縁	口縁5片	口径15.0	(外) ナダ	精良	やや 悪い	(外) 淡青色 (内) 淡青色
	84	体	生	口縁	口縁5片	口径14.2 底径最大径27.0 高さ 6.0	(外) 口縁部はハコとナダ (内) 口縁にナダ、底に側ナダ	3mm以下の石英砂粒、含云母を含む	普通	(外) 淡青色 (内) 淡青色
S E 06	85	*	*	口縁	口縁5片	口径15.0	(外) ナダ	3mm以下の石英砂粒、含云母を含む	良好	表面とも 淡青色
	86	*	*	地形		口径14.2 底径最大径27.0 高さ 6.0	(外) ナダ、チヂみ状の軟塑性 (内) ナダ、底面は擦痕風景	3mm以下の石英砂粒、含云母を含む	*	(外) 淡青色 (内) 淡青色
	87	*	*	口縁	口縁5片	口径18.0	口縁部分脚ナダ (外) 上部はミカキ、下部は脚ナダ (内) 下部はハコ、底は不明	3mm以下の石英砂粒、含云母を含む	*	表面とも 淡青色
	88	*	裏	脚部~ 底部	底径 7.2	(外) ナダの壁ナダ、丁寧なナダ (内) ナダのハケ目	3mm以下の石英砂粒、含云母を含む	*	表面とも 淡青色 表面ともスル タナ	瓶?
S E 07	89	*	*	脚部~ 底部	底径 8.0 底径最大径 33.1	底面とも脚部不明	1~5mm砂粒を 多く混入	普通	表面とも 淡青 淡青色 内面やや悪い	
	90	*	輪	底	口径 6.3 底径 12.9 底径 6.0 厚径 9.9	口縁部は壁ナダ (外) 底部の後、脚ハケ (内) ナダ	砂粒を多く含む	*	表面とも 淡青 淡青色 外腹に赤鉄 鉱付	

測定名	No.	種類	器種	器部	地量 (m)	手土の特徴	地土	成色	色調	備考
S-E 06	91	赤生	算	略分析	口径 底部最大径 器高	6.4 6.7 5.3 (外)底面のため調査不規 (内)ナダ	2mm以下の石英 ・砂粒を多く含 み組む	良好	(外)明黄色 (内)浅い褐色	
	92	*	高杯	口縁部			2mm以下の石英 ・砂粒を多く含 み組む	*	(外)淡褐色 (内)淡褐色～ 淡灰褐色	
S-D 01	94	赤生	後	底部	直径 7.4	(外)底面のため調査不規 (内)ナダ	1mm以下の石英 ・金雲母等をか なり多く含み、 やや粗い	*	(外)明黄色 (内)淡灰褐色	
	95	瓦器	塊	底部	直径 6.8	(外)底面がひどい (内)底面がひどいナダ	細良	普通	同面とも 暗灰褐色	中層
S-D 01	96	白器	*	*	直径 6.0	(外)底部……ロクロ調整 カシナケズリ (内)ロクロ調整	細良 灰白色	良好	緑がかった透 明板	中層
	97	陶器	透明	壳形	口径 6.2 最大径 10.0 器高 3.7	(外)上部……底ナダ 底部……ケズリ (内)底ナダ	細良 淡赤褐色	*	(外)明黄色 (内)暗赤褐色	下層
S-D 03	98	*	揮体	口縁部	復元口径 28.3	(外)ロクロナダ (内)7本基準の先端	細良 明褐色	*	同面とも乳白 色のすい板	中層
	99	赤生	塊	口縁部	復元口径 34.6	(外)底ナダ (内)ナダ	砂粒を多く含む	*	同面とも赤味 をおびた明褐色	
S-D 03	101	*	*	口縁部		口縁部及し内面……ナダ (外)30本基準のハック	1~2mm石英粒 を若干含む	普通	(外)茶色 (内)淡灰褐色	
	102	瓦器	塊	底部	直径 5.2	底面のため調査不規	細良	やや 甘い	(外)淡褐色 (内)淡灰褐色	
PIT 1	104	赤生	算	壳形	口径 7.9 器高 6.5 器径 3.3	(外)底面がひどく調査不規 (内)ナダ上部であらうか	砂粒を多く含む (特に石英粒)	普通	(外)淡褐色 (内)淡灰褐色	
PIT 27	105	*	塊	口縁部	復元口径 27.4	(外)底ナダ、幅または前後の粗いハック (内)ナダ、底面がからうじて複数	石英・長石粒等 砂粒を多く混入	*	(外)ややくろ い褐色 (内)灰白色	
PIT 33	106	須恵器	器	口縁部		(外)構造底纹 (内)ナダ	細良	同面とも少し 暗い灰褐色		
PIT 42	108	*	高台付块	底部	直径 7.2	同面ともナダ	若干、細砂粒混 入	*	灰色	
PIT 44	109	赤生	器	底部	直径 6.4	同面とも底ナダ、底面あり 内面は先端部分の充満あり	砂粒を多く混入	普通	同面とも暗 褐色(底面あり)	
	110	*	算	壳形	11径 10.8 器高 5.6	同面とも底ナダ 底面が初期に残る	石英・長石・チ ヤート粒 1~5 mmを多く含む	*	(外)淡褐色 (内)淡灰褐色	
PIT 49	111	*	康	底部	復元底径 7.2	(外)底ハック調整 外証記……ナダ (内)ナダ	石英・長石粒を 中心に砂粒多	*	(外)明褐色～ 黑色 (内)ややくろ い褐色	
	113	*	*	底部	直径 7.0	(外)底ナダ、片側底凹ナダ (内)ナダ	長石・石英粒を 少し含む	良好	(外)褐色～黑 色 (内)暗褐色	
PIT 73	114	*	*	底部	直径 8.1	同面とも調査不規	石英・長石・チ ヤート粒を多く 混入	普通	同面とも 明褐色	
PIT 83	115	*	*	口縁部	復元口径 11.8	(外)ナダと底ナダ (内)ナダ	石英粒・長石粒 を多く混入	*	(外)明褐色 (内)ややくろ い褐色	

遺跡名	No.	種類	性別	年齢	法量 (kg)	手 法 の 特徴	地 土	焼成	色 調	備考
Pit 89	116	生	男	正 部	板厚 9.8	(外)滑いハケ (内)滑型不明	砂粒を多く混入	良好	(外)暗灰褐色 (内)深灰色	
Pit 101	117	#	#	口縁部		(外)滑ナダ (内)ナダ	全体に赤褐色斑付	普通	両面とも明褐色 赤褐色斑付	
Pit 102	118	#	雄	完 形	口径 9.8 側厚 5.2 底径 3.6	両面とも滑ナダ 全面に赤褐色斑付	3mm以上の石英 ・砂粒・全表面 を含む	#	(外)明褐色 (内)暗褐色	
Pit 114	119	#	雄	正 部	底径 8.8	(外)滑い滑ナダ ・外縁部 ナダ (内)ナダ	1~5mmの砂粒 を多く混入	良好	(外)明褐色 (内)暗褐色	
青 金 器 上 層	121	土 筒 器	雄	口縁部	口径32.2	両面とも滑ナダ 底部に黒斑による青緑斑紋	2mm以下の石英 ・砂粒を多く含む	普通	(外)灰褐色 (内)青色や 赤色	
	122	#	#	底 部		(外)ナダ (内)カスミ	2mm以下の石英 ・長石・全表面 を含む	良好	両面とも 白色、三面あり	121と 同一個体
	123	#		底 部	底径 4.2	(外)ナダ (内)T字なしナダ	3mm以下の石英 ・砂粒を多く含 み	良好	両面とも 黑色	
	124	#	雄	裏 部		両面とも滑ナダ	2mm以下の石英 ・砂粒を多く含 む	普通	両面とも 淡黄褐色	121、122と 同一個体
	125	灰 墓 器	雄	裏 部		(外)ナダ (内)擦摩斑紋	焼 黄	良好	両面とも 暗赤褐色	
	126	#	平板か	断面5片	底径 9.6	(外)やや黄、滑ナダ、ヘラケズリ (内)セヒテ、滑ナダ	砂粒を少量含む	#	両面とも 青灰色	
白 金 器	136	生	雄	口縁+ 側部	11号 30.5 側部最大径45.0	(外)口縁部一箇ナダ、時代あり ・側部 縫へナダ+ナダ (内)ナダ	3mm以下の石英 ・砂粒を多く含 む	#	(外)暗褐色 ・赤褐色斑付 (内)深灰褐色	
	137	#	雄	底 部		(外)滑ナダ、凸面2箇 (内)ナダ	1mm以下の石英 ・砂粒・全表面 をやや多く含む	普通	両面とも 暗褐色	
	138	#	雄	口縁5片	口径17.2	(外)縫へナダ+ガタ (内)一部に滑ナダ、側部擦摩不規	焼 黄 全表面。チャ ートを含む	良好	両面とも 明褐色	
	139	#	器 古	底径5片	板厚底径10.2	(外)縫の痕ハケ日、側部はナダ (内)ナダ	砂粒を多く混 入	#	(外)明褐色 (内)深灰褐色	
中 層	140	#	#		底径15.8	(外)縫ハケ 創部一箇ナダ (内)ナダ 縫一部ハケ	1mm以下の石英 ・砂粒・全表面 を含む	#	(外)灰褐色 黒点あり (内)深褐色	
	141	#	雄	口縁5片	復元口径20.2	両面とも滑ナダ	石英・砂粒を含む	普通	両面とも 淡黄褐色	
名 金 器 下 層	145	生	雄	口縁5片	復元口径28.6	両面とも滑ナダ	砂粒を少量含む	良好	両面とも 淡黄褐色	
	146	#	雄	口縁部	口径24.4	両面・側部口縁滑ナダ 側部外縁に滑ナダ	粗粒な石英・長 石・全表面等を やや多く含む	#	(外)深褐色 (内)暗褐色	
	147	#	器 古		11号 8.9	(外)ハケ (内)ナダ+シボリ	石英・長石を 多く含み黒い	#	両面とも 明褐色	
	148	#	高 环	裏 部		(外)ヘラナダ (内)レギリあり	焼 黄 (赤色粒子を含む)	普通	両面とも 暗い半褐色 (赤色粒子含む)	

遺物名	No.	種類	器種	各部：寸法 (cm)	手 汽 の 特 徴	胎 土	焼成	色 調	備考
土器	145	弥 生 壺	底部片	底径 8.2	(外)丁寧なナデ (内)ナゲ(粗面)	全表面の凹凸が多く、石突・瓦石等を少許含む。微密。	良好	(外)黒褐色で又火付 面 (内)褐色或は黑色	
	150	*	壺	底部片	底径 8.0	(外)シャヤ、外底部は(粗面)はナゲ? (内)ナゲ(粗面)	石突を多く含む全表面を少墨含むやや粗い	*	(外)赤褐色 (内)黑色

註

- 森貞次郎、岡崎敏「福岡県板付遺跡」「日本農耕文化の生成」1961年
- 中山平次郎「銅鏡・銅劍の新資料(板付北崎の遺物)」「考古学雑誌第7卷7号」1917年
- 福岡市教育委員会「比恵遺跡、第6次調査遺構編」「同遺物編」福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集、130集 1983年、1986年
- 福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告(2)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集1975年
- 原田大六「日本古墳文化—奴国王の環境—」1954年
- 福岡市教育委員会「那珂君休遺跡」「那珂深ヲサ遺跡II」福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集 1982年
福岡市教育委員会「那珂君休遺跡II」福岡市埋蔵文化財調査報告書第106集 1984年
- 福岡市教育委員会「那珂久平遺跡I」福岡市埋蔵文化財調査報告書第133集 1986年
- 福岡市教育委員会「那珂深ヲサ遺跡I」「同II」福岡市埋蔵文化財調査報告書第72・82集 1981年、1982年
- 福岡市教育委員会「那珂八幡古墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第141集 1986年
- 1987年3月報告書刊行予定
- 福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告(9)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第98集 1983年
- 福岡市教育委員会「諸岡遺跡第14・17次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集 1984年
- 那珂遺跡群では現在までに8次わたる調査が実施されており、1987年3月に7次と8次調査について報告書が刊行される予定である。
- 鏡山猛「環溝住居址論叢」「九州考古学論叢」吉川弘文館 1972年
- 3に同じ
- 篠紫野古代史研究会「見捨てられた春住遺跡—縄文晚期終末へのアプローチ」篠紫野古代史研究会々報第2集 1972年
- 瑞穂遺跡調査団「瑞穂福岡市比恵台地遺跡」日本住宅公团 1980年
- 福岡市教育委員会「比恵遺跡 第8次調査概要」福岡市埋蔵文化財調査報告書第116集 1985年
- 福岡市教育委員会「比恵遺跡 第9・10次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第145集 1986年

図 版



SE 04 出土土器群



比恵遺跡群周辺航空写真（昭和56年撮影）



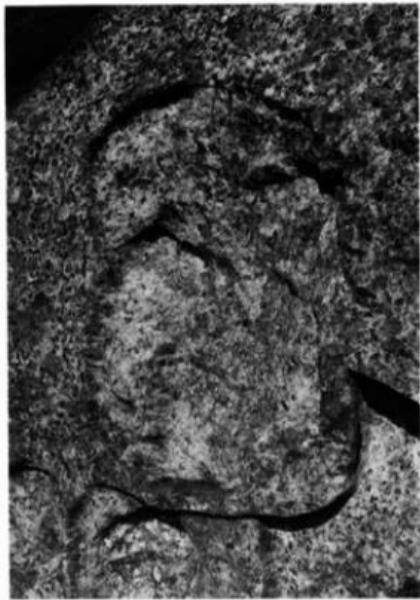
(1)



(2)

(1) I区調査区全景（東から）

(2) II区調査区全景（西から）



(1) SK01 (西から) (2) SK02 (西から) (3) SK03 (北東から) (4) 同土層状況



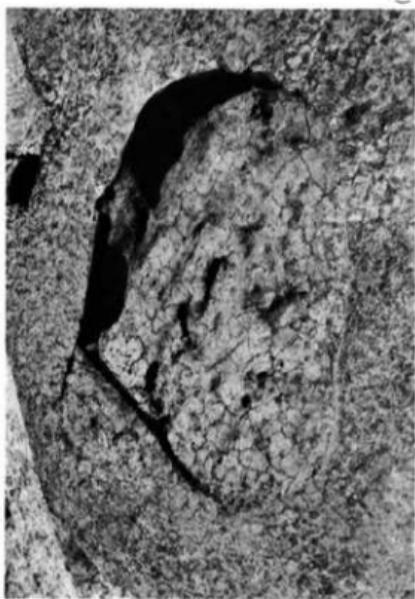
(1) SK04 (北から) (2) 同土層状況 (3) 遺物出土状況



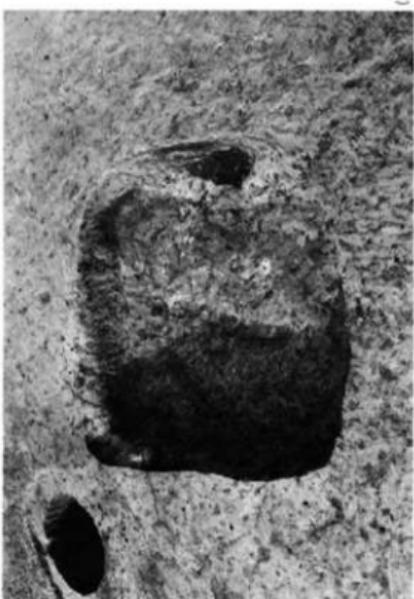
(1)



(2)

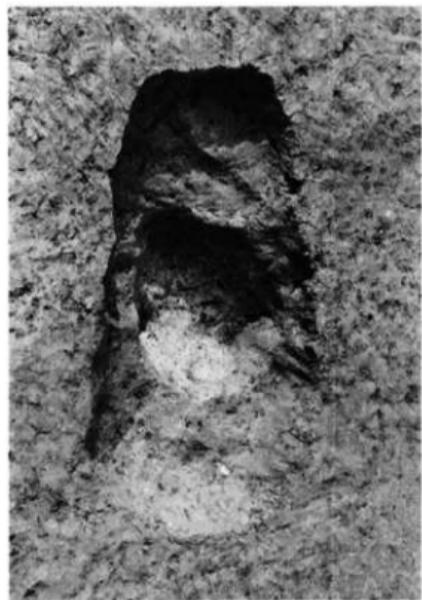


(3)



(4)

(1) SK05 (南から) (2) SK07 (南から) (3) SK08 (北から) (4) SK10 (南から)



(1)



(2)



(3)

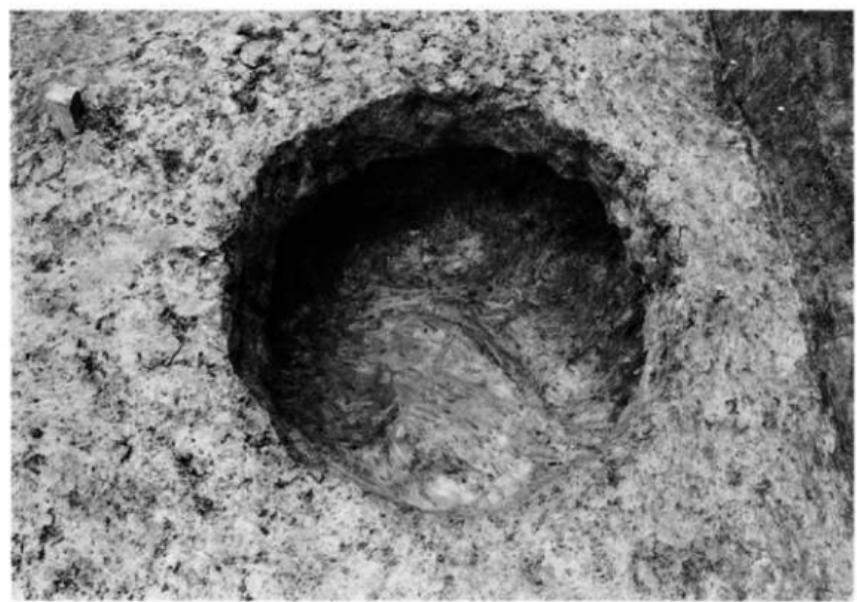


(4)

- (1) SK11 (北から) (2) SK12 (東から) (3) SK13 (北から) (4) SK14 (北西から)



(1)

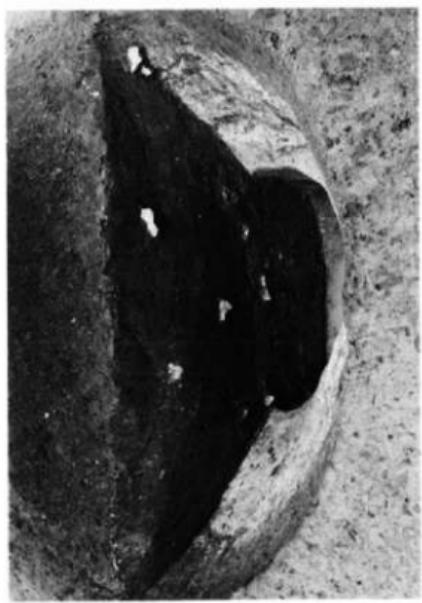


(2)

(1) SE 01 (南から) (2) SE 03 (東から)



(1)



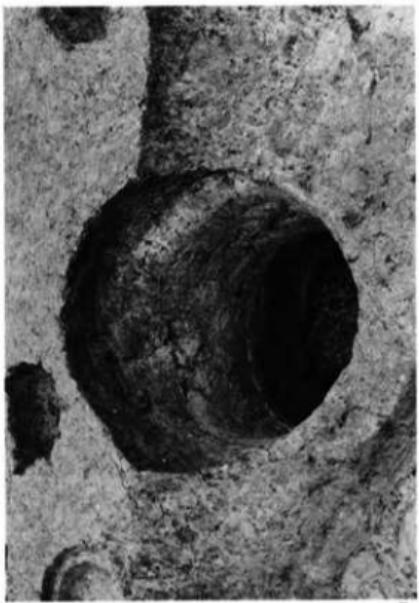
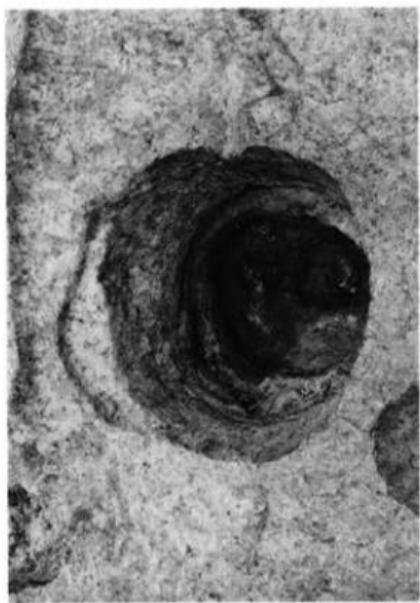
(2)

(3)

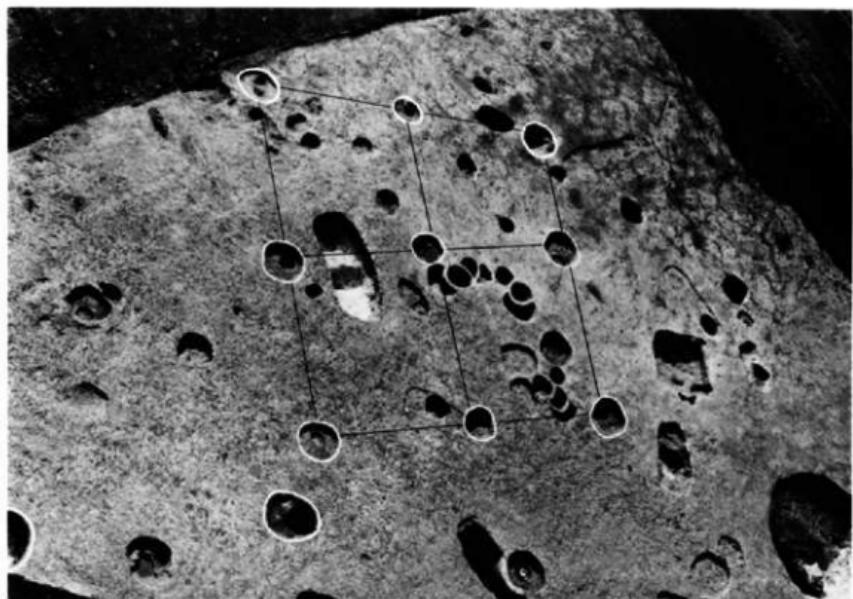
(1) SE 02 (北から) (2) 同土層状況 (南から) (3) 同瓢骨出土状況



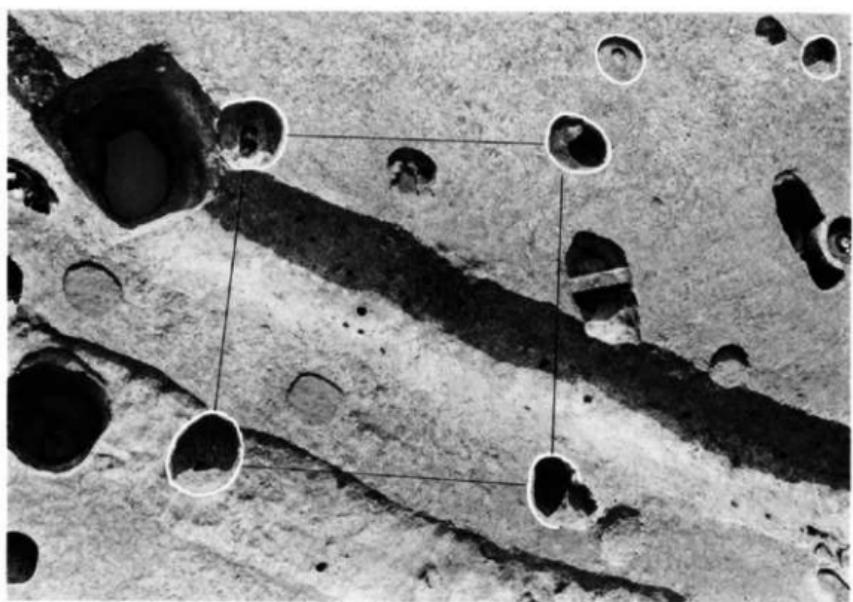
(1) SE 04 (北西から) (2) 同遺物出土状況 (3) 同 (東から)



(1) SE 05 (西から) (2) SE 06 (西から) (3) 同土層状況 (西から) (4)同遺物状況



(1)



(2)

(1) SB 01 (東から) (2) SB 02 (東から)



(1) SD 01・04・05 (南から) (2) SD 01 (東から) (3) 同土層状況 (東から)



(1)

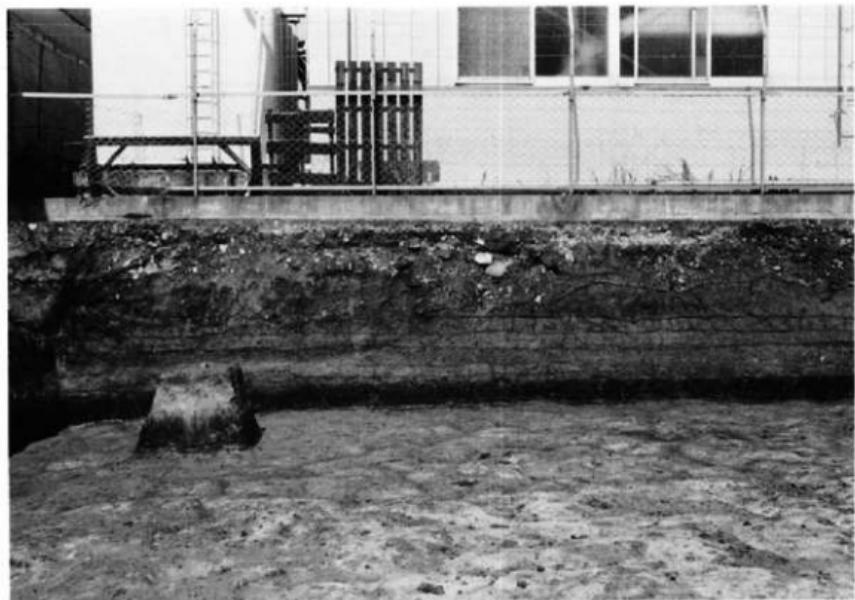


(2)

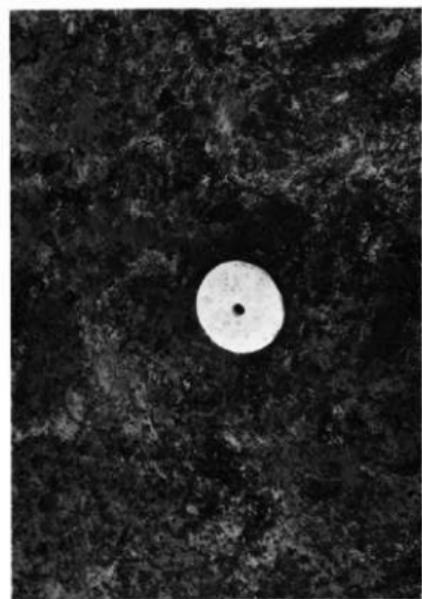


(3)

(1) SD 03 (南西から) (2) SD 02 (北から) (3) SD 06 (北東から)



(1)

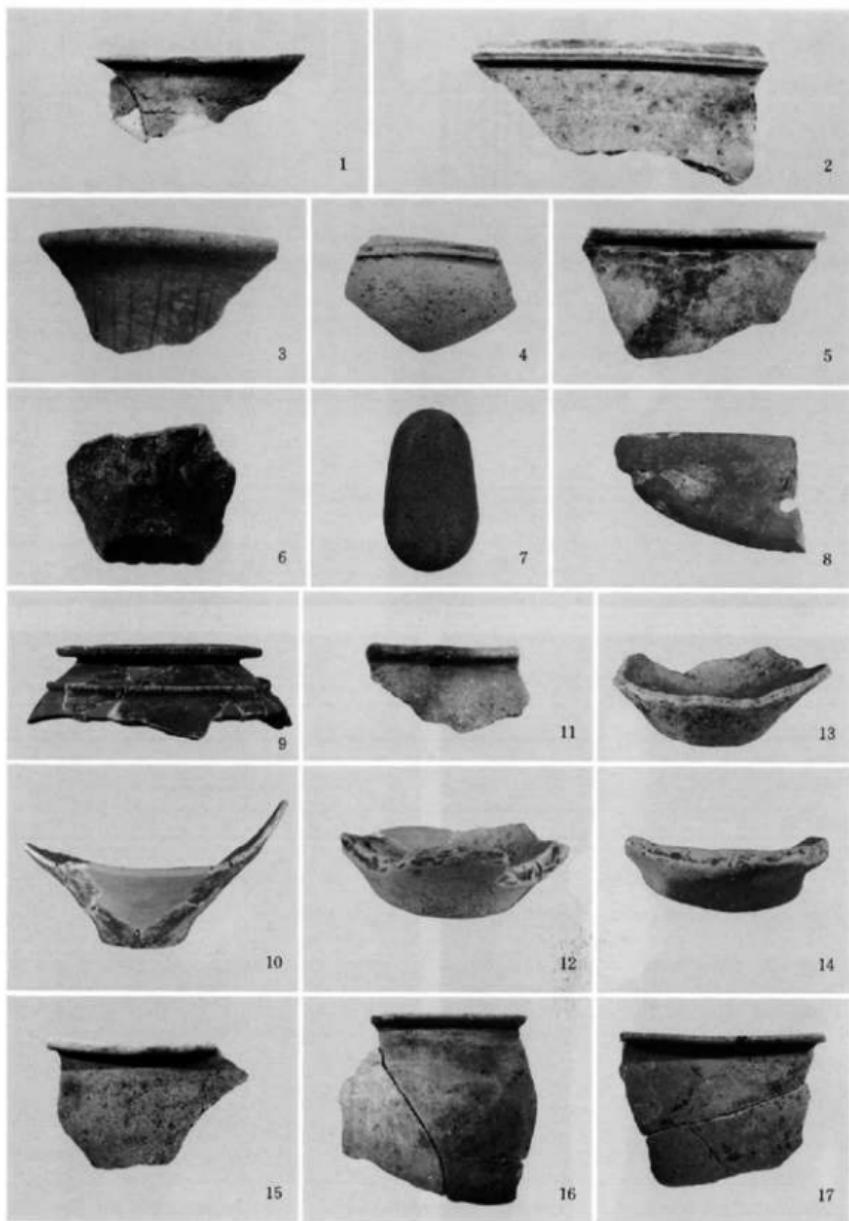


(2)

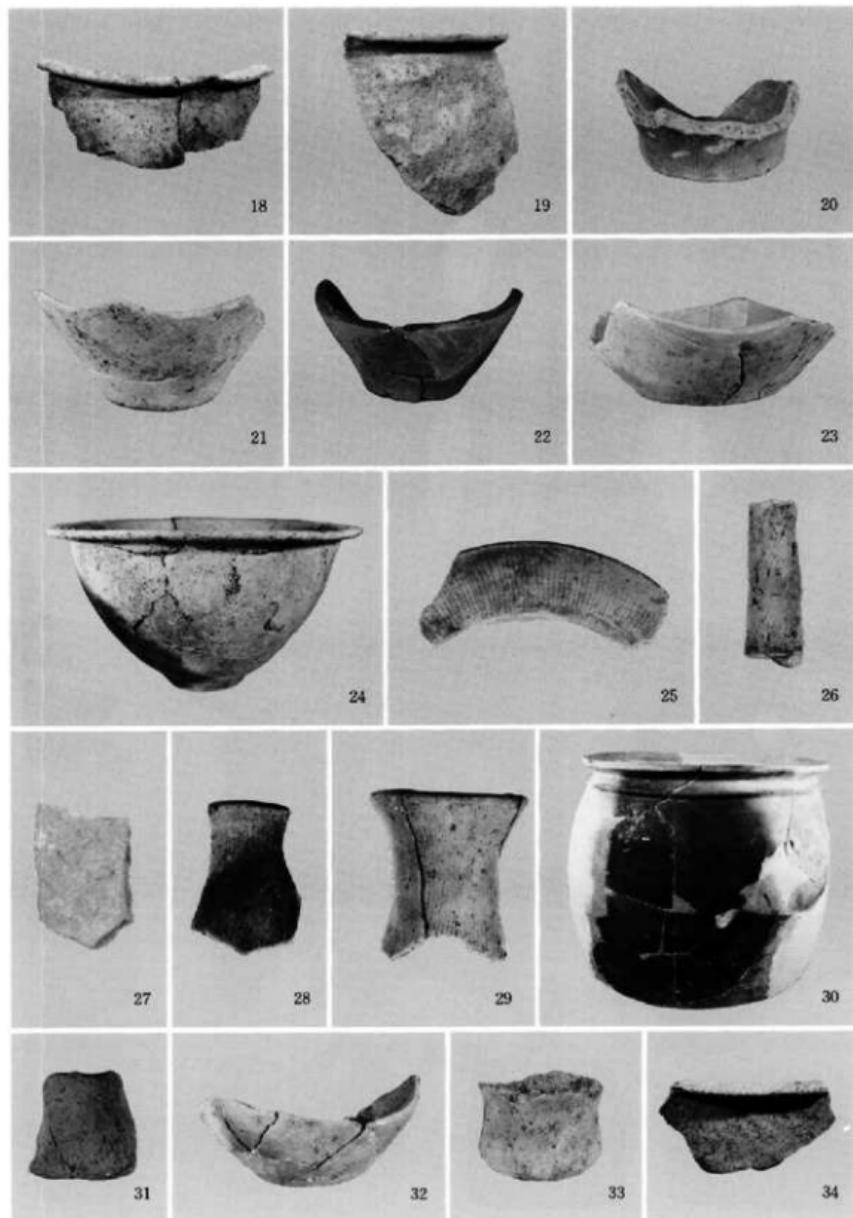


(3)

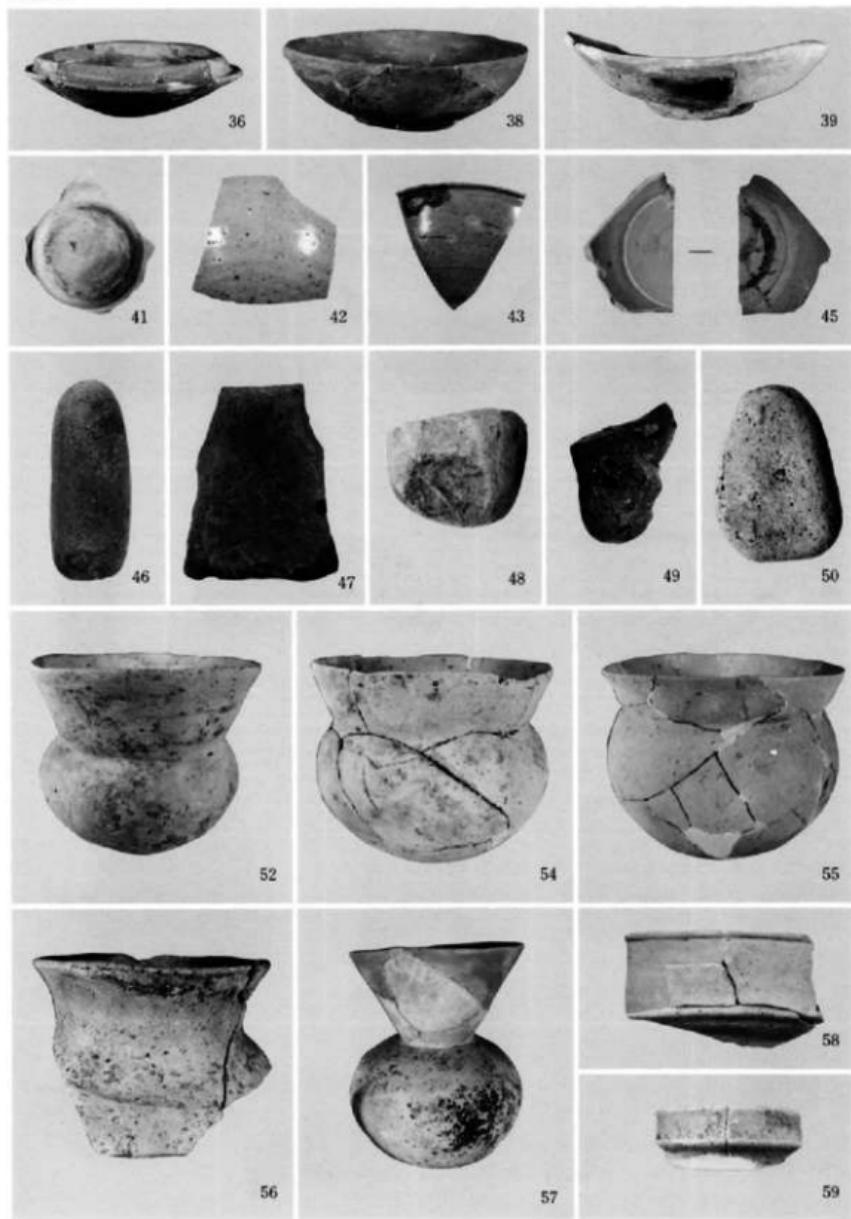
(1) I区北西壁土層状況（南東から） (2) 包含層遺物出土状況 (3) Pit 7 遺物出土状況



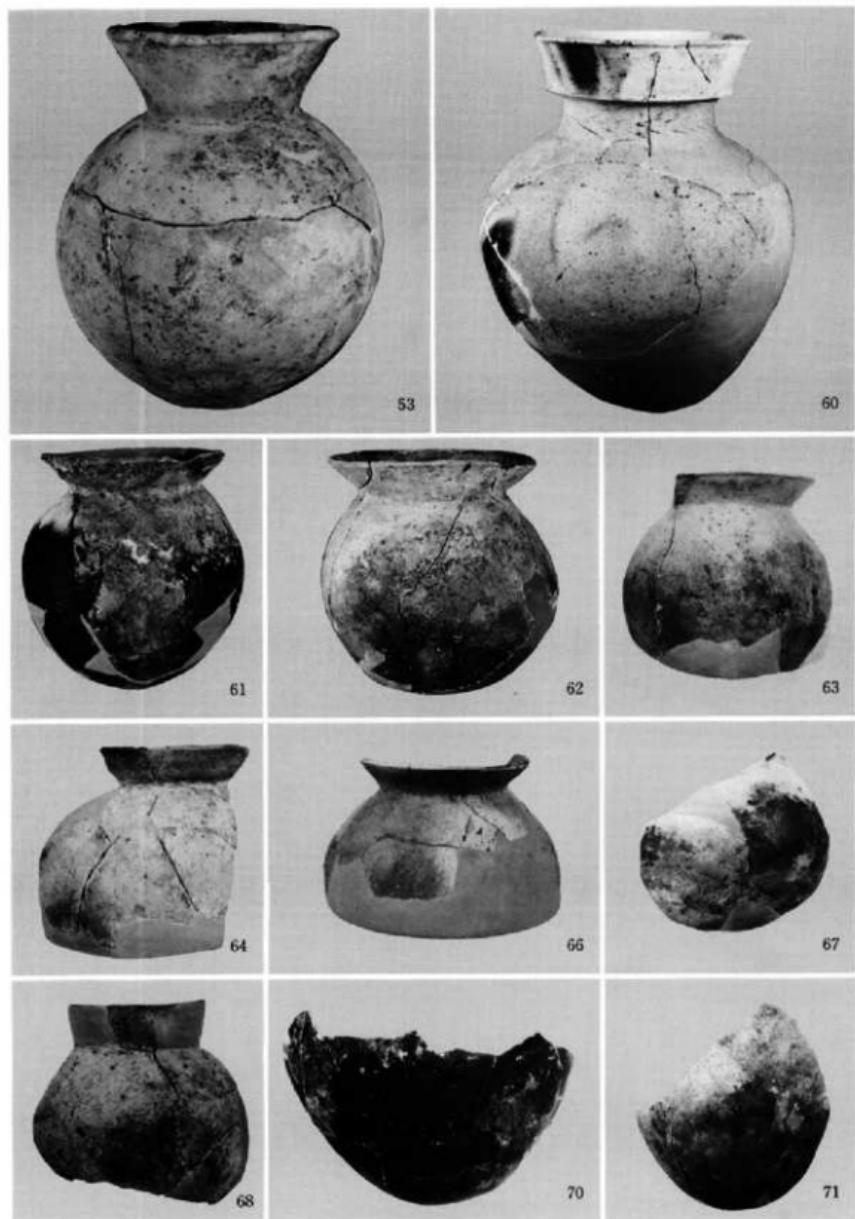
出土遺物 (1); 1・2はSK02, 3~8はSK03, 9~17はSK04

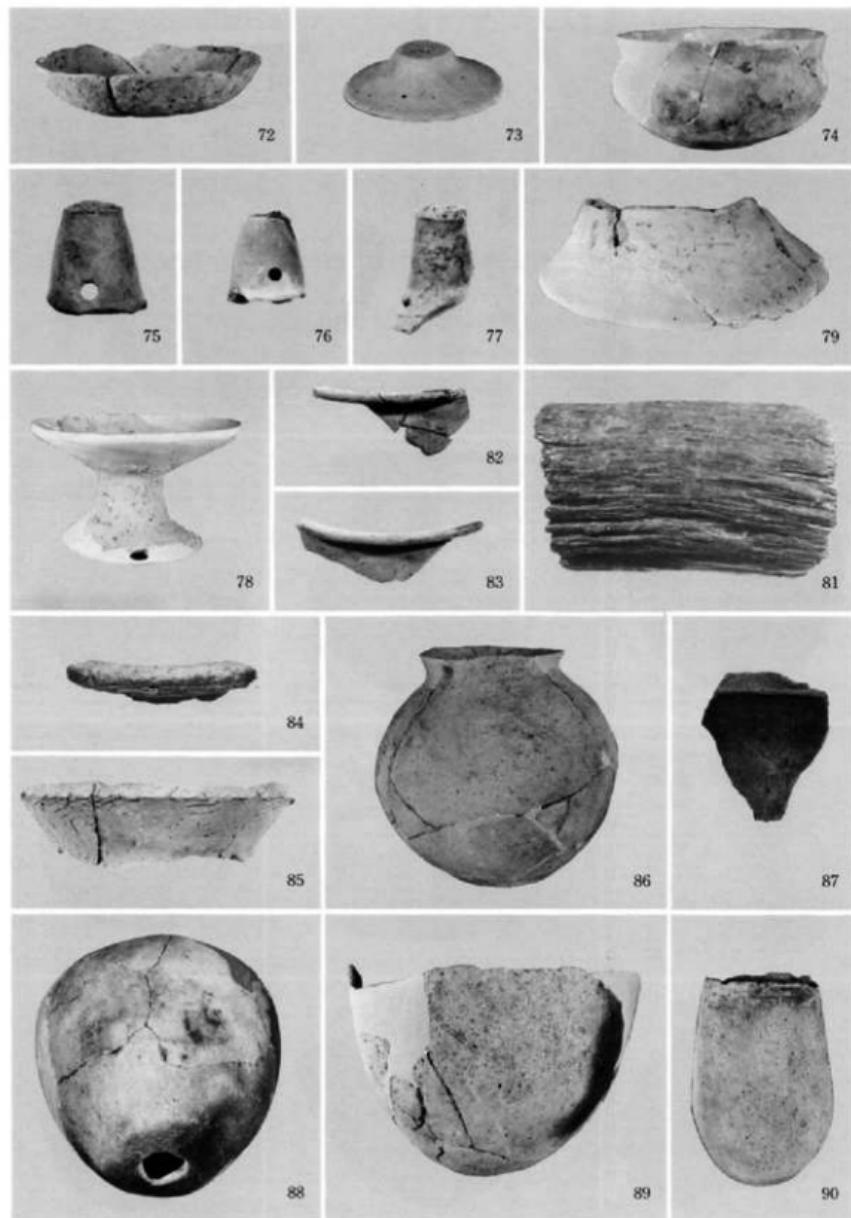


出土遺物 (2) ; 18~30はSK04, 31はSK09, 32はSK10, 33・34はSK12

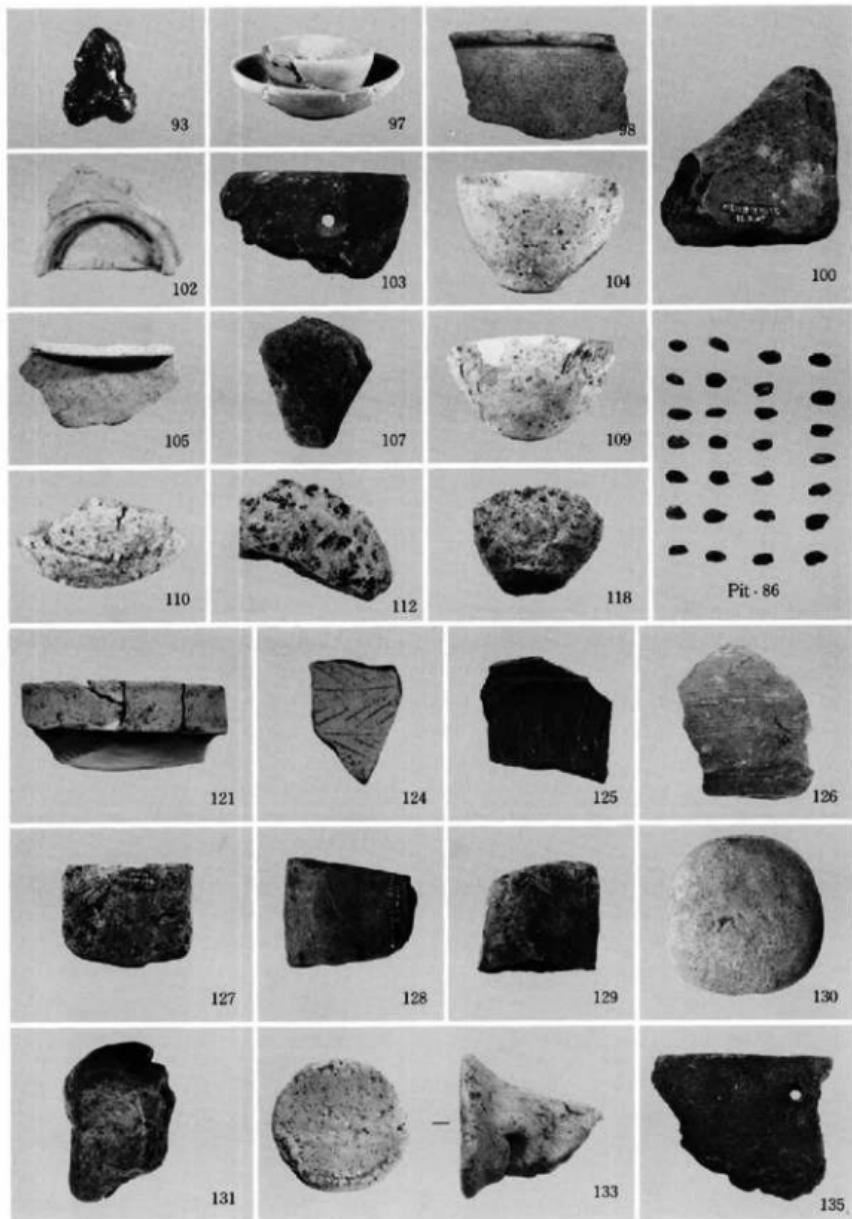


出土遺物 (3) ; 36-50 \pm S E02, 52-59 \pm S E04

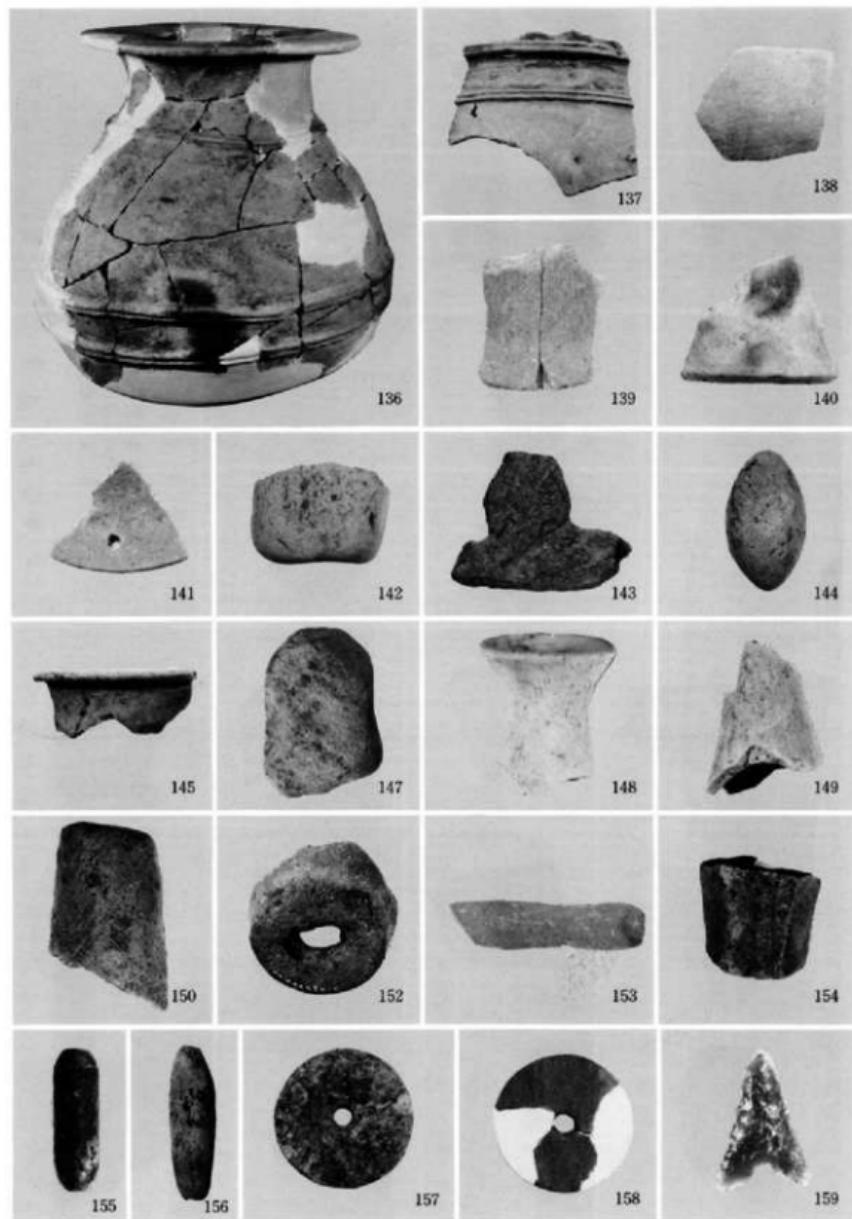
出土遗物 (4) ; 53~71 I² S E04



出土遺物 (5); 72-79はSE04, 82・83はSE05, 81・84-90は出土遺物



出土遺物 (6) ; 93はSB01のP-3, 97~98・100はSD01, 99・101はSD03, 102・103はSD06,
104~118はピット。121~135は包含層上層



出土遺物（7）；136～144は包含層中層、145～159は包含層下層

Ha ka ta
博 多 遺 跡 群

— 第 27 次 調 査 —



遺跡略号 HKT
遺跡番号 8507

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過と歴史的環境

那珂川と御笠川の二大河川によって形成された福岡平野の、博多湾に面した地域には古砂丘が形成されており、特に那珂川と御笠川に挟まれた古砂丘は、狹義の博多と言われる地域でもある。この砂丘は弥生時代から生業が営まれ、古墳時代には前方後円墳が築かれる。又、奈良、平安時代には官街が存在するが、博多が貿易港として脚光を得るのは、平清盛による袖の港の開発である。以来、博多は海外貿易の拠点として繁栄を極めるが、一方では貿易の利権にからむ争乱は絶えず、しばしば博多は灰塵に埋めている。博多の復興は秀吉によって行なわれ、現在の町並みの原形に相当すると言われる。遺跡は弥生時代から近世に及ぶが、調査の目的となるのは中世博多の都市景観の復元であろう。近年の博多における再開発は、市営地下鉄の営業開始と共に著しく、道路整備やビルの高層化等の開発は目白押しである。こうした開発に伴い現在までの遺跡調査は35次を数える。今回の発掘調査は東洋館(旅館)の建て替えに伴うもので、昭和60年5月22日から6月18日までの期間に発掘調査を実施した。東洋館の地番は福岡市博多区祇園町1番である。対象面積は678m²であるが、安全対策の一環として養生等を行なったため、実際の調査面積は360m²にすぎない。(井澤)

2. 調査の組織

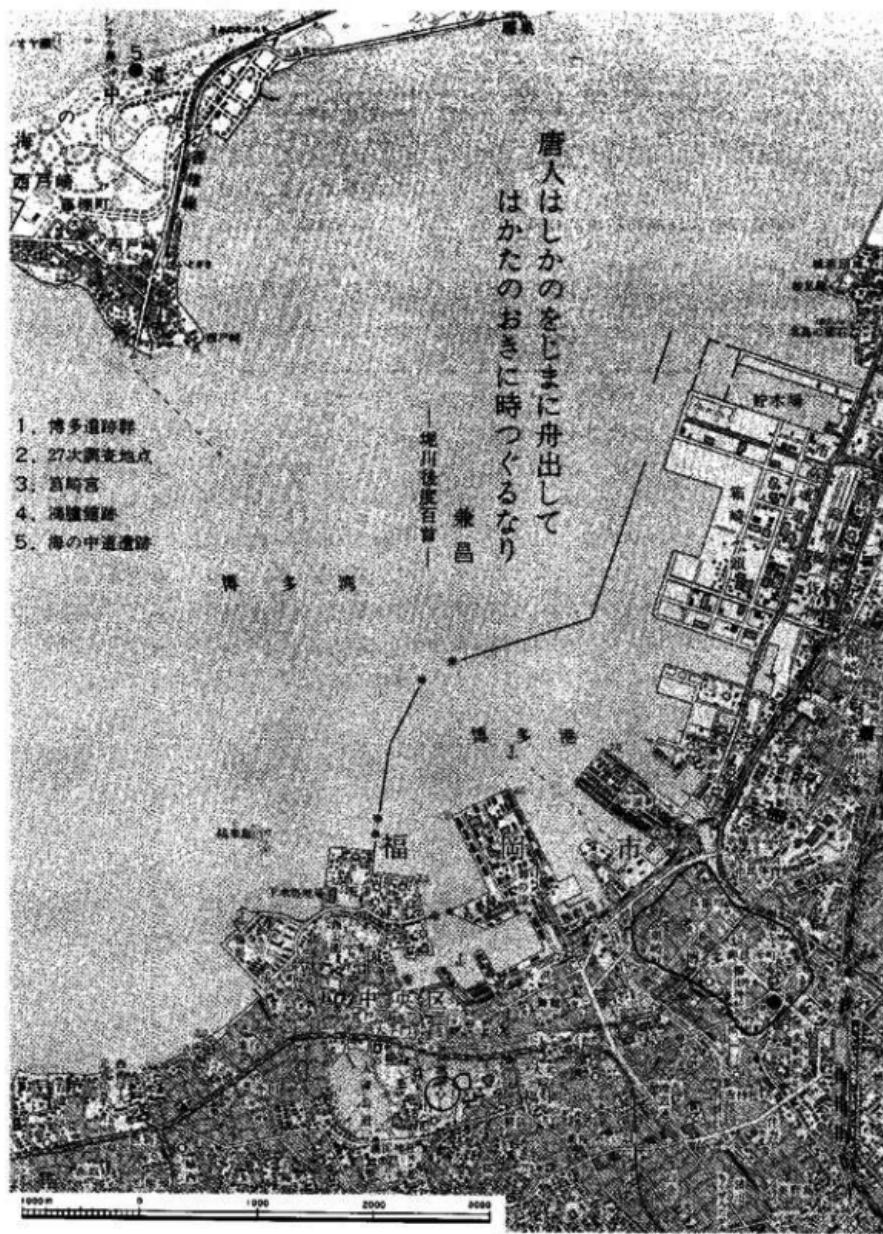
調査委託 東洋館(代表 西島俊子)

調査主体 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課

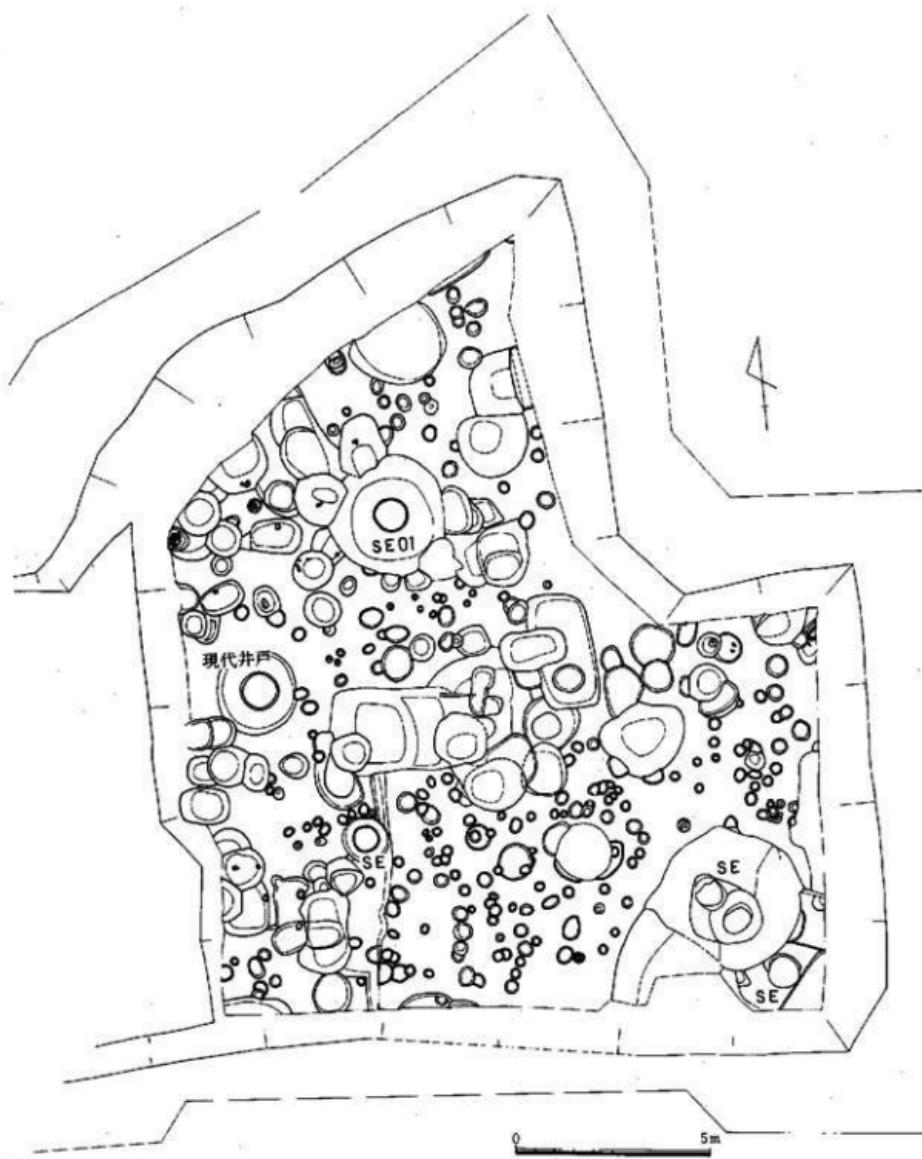
事務担当 折尾学(埋蔵文化財第1係長) 飛高憲雄(埋蔵文化財第2係長)
松延好文

調査担当 井沢洋一、常松幹雄

発掘調査にあたっては、埋蔵文化財課の山崎純男(文化財主事)、力武卓治、杉山富雄、大庭康時、小畑弘己、米倉秀紀氏らの協力を賜わった。



第32図 博多遺跡群の立地と環境（縮尺1/50,000）



第33図 博多遺跡群第27次調査中世遺構配置図（縮尺1/150）

第2章 調査の概要

現地調査は古代～近世の面と古墳時代の主に二面で行なった。上面で検出された遺構は、中世井戸5基、近世の瓦組井戸1基、土壙が約50基、他に柱穴状のビットなどがある。

中世の井戸は井筒が円形プランをなす桶巻づくりである。

出土遺物は、青磁（龍泉窯・同安窯系）の碗・皿、白磁の碗・皿・四耳壺、黄釉鉄絵の盤、綠釉陶器、他は瓦器・土師質の碗・杯・皿などが容器類の主なものである。また中世と古墳時代の面の間の茶褐色砂層より出土した奈良時代の須恵器の杯の底部には「十」とも読める墨書きが見うけられる。

中世を主体とする遺構面の調査後、下層面で遺構確認を行なったところ、北東隅に古墳時代の住居跡1基、溝5条を検出した。

住居跡出土の遺物は、いわゆる古式土師器の甕、高杯、丸底壺などであり、時期は、畿内という布留式の占段階である。

5条の溝中、1号溝では、粘土桟の埋葬施設を確認した。桟の外法は長軸210cm×短軸60cm、内法は長軸170cm×短軸45cmをはかる（図版23-2）。桟の西側には赤色顔料をつめた完形の丸底壺（蓋として口径10cm程の鉢を使用）を副葬していた。壺は、住居跡とはほぼ同じか、やや下る時期と思われる。また赤色顔料は、その後の分析でベンガラであることが明らかとなった。

内部主体の中央部からは、径3～5mm程度のコバルトブルーのガラス玉5個が出土した。

博多遺跡群のこれまでの発掘では、今回の27次調査の周辺で、弥生時代中期～後期の喪棺墓群。弥生時代中期と後期終末～古墳時代前期にかけての住居跡群などが調査されている。また27次調査区の南東部、17・20次調査にまたがって方形周溝墓が検出された。台状部の規模が東西12m、南北12mの略方形、周溝は幅1.5～3mで現況での深さが0.7mであったという。ここでは、割竹形木棺を主体部とする埋葬施設をもち、棺の東端に近い西側縁上部から、鉄劍と鉢各1が出土している。

博多浜の南西部に位置する27次調査区の立地は、弥生～古墳時代にかけては、砂丘上に形成された高まりの部分といえる。該期の生活・埋葬遺構は、この付近にかなりの集中を見ることができる。

調査の結果を総合すると、今回の調査で検出された5条の溝は、古墳時代前期の方形周溝墓（墳丘墓という表現が適切かもしれないが）の周溝であった可能性がつよい。（當松）

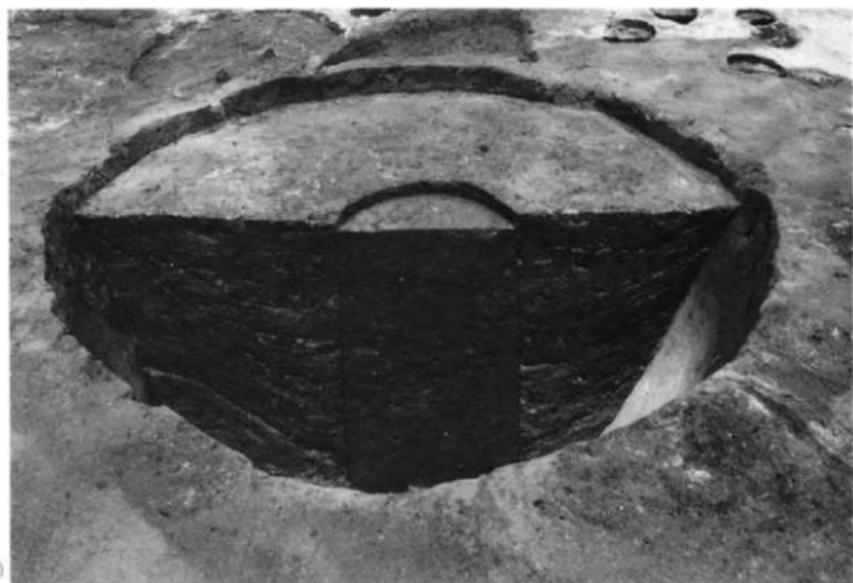
註

(1) 福岡市教育委員会「博多Ⅲ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第118集 1985年

(2) 博多31次の調査報告で、現地形の等高線から、ⅠⅠ地形の推定復元を行なったので参照されたし。「博多Ⅹ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第150集 1987年



(1) 博多道路群第27次調査区とその周辺（東より） 86年6月 (2) 博多遺跡群第27次調査中世面全景（南より）



(1) 1号井戸 (SE 01) の土層断面 (南より) (2) 1号溝で確認された粘土塚の埋葬施設 (北より)

福岡市

中部地区埋蔵文化財調査報告 II

福岡市埋蔵文化財調査報告書第146集

1987年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2丁目

印刷 正光印刷株式会社